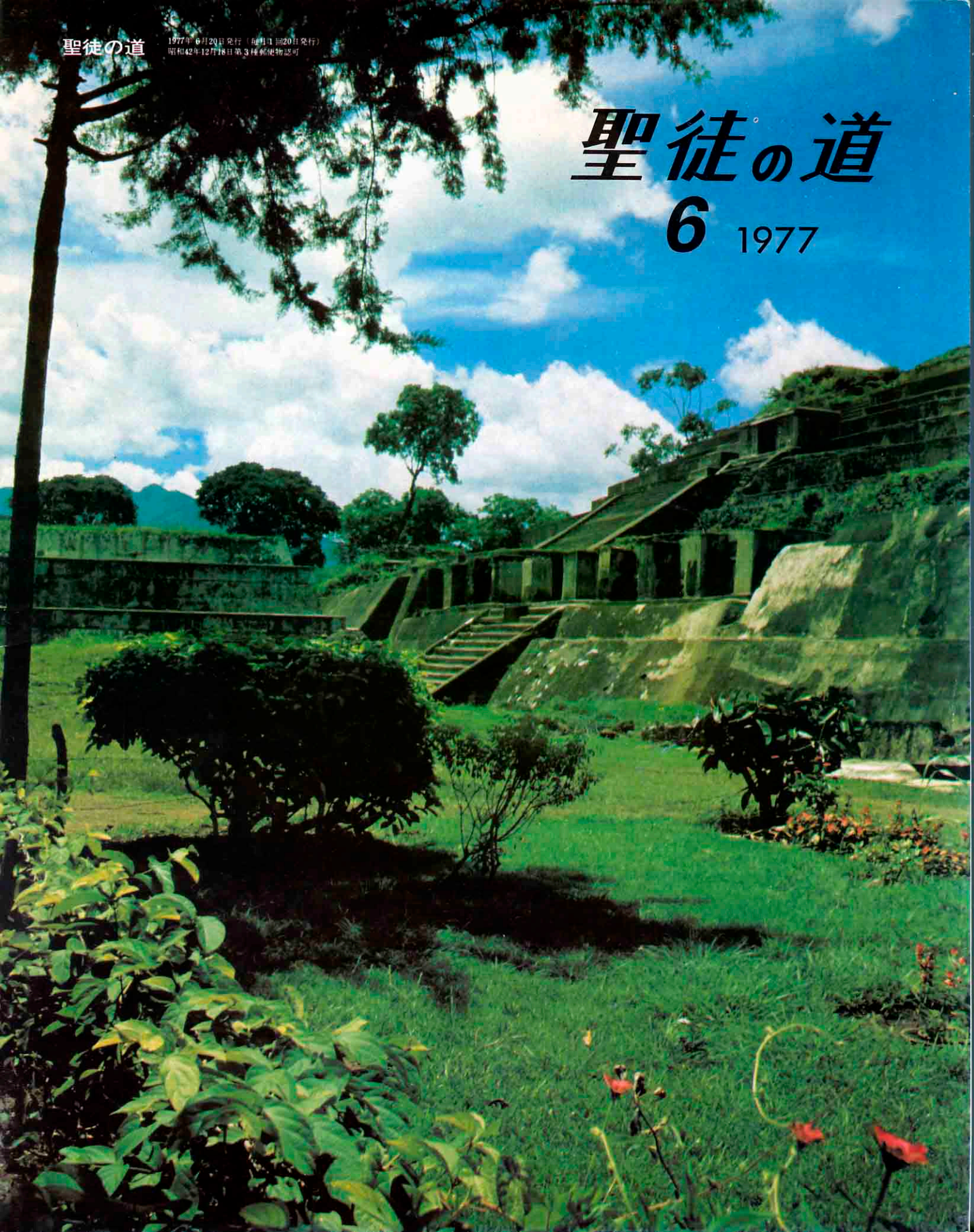


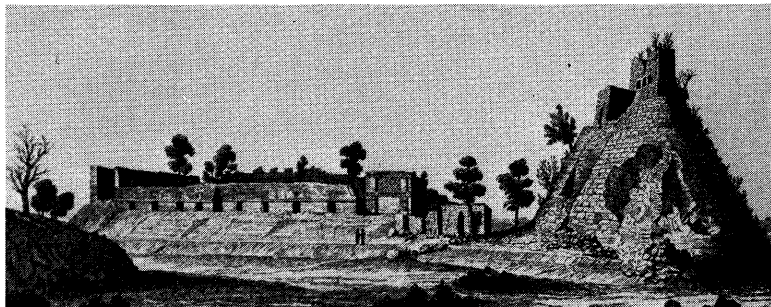
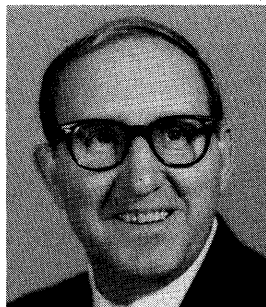
聖徒の道

1977年6月20日発行（毎月1回20日発行）
昭和42年12月18日第3種郵便物認可

聖徒の道

6 1977





末日聖徒イエス・キリスト教会

1977年 6月号

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルバート・L・ステイプレー
リグランド・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレイ
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト

諮問委員会

ゴードン・B・ヒンクレイ
マービン・J・アシュトン
L・トム・ペリー
マリオン・D・ハックス
ジェームズ・A・カリモア
ロバート・D・ヘイルズ

教会誌編集主幹

ディーン・L・ラーセン

国際機関誌

・ラリー・ヒラー (編集主幹)
キャロル・ラーセン (編集副主幹)
ロジャー・ギリング (デザイナー)

「聖徒の道」

八木沼 修一 (日本語コーディネーター)

も く じ

神は遠くない	マリオン・G・ロムニー	277
「子供をいらだたせてはいけない」	F・エンチオ・ブッシャ	279
ジョン・ロイド・スチーブンスとマヤ遺跡	ジェームズ・S・パッカー	282
金融業者とバンカー監督	ウィリアム・ハートレー	284
長老見込み会員に訴える	ボイド・K・パッカー	286
モルモン経の英雄たち		289
けいけん		290
勇気ある人		292
にちよう日のはこ		294
おもちゃばこ		296
「鉄柱を打て！」	B・ロイド・ポールマン	297
「永世にわたる記録」	スペンサー・W・キンボール	300
救い主に見る教師の模範	セオ・E・マキーン	302
模範の力	デルバート・L・ステイプレー	304
ローカル・ニュース		306

◇今月の表紙◇

ジョン・ロイド・スチーブンスが探検した廃墟

聖徒の道 6月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5-8-10
配 送 東京ディストリビューション・センター
東京都港区南麻布5-8-8
定 価 年間予約1,700円 1部150円
海外予約1,700円

INTERNATIONAL MAGAZINE Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京0-41512

口座名 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京ディストリビューション・センター

神は遠くない

第二副管長

マリオン・G・ロムニー



パウロはテサロニケとベレヤにおける迫害の手を逃れ、アテネでシラスとテモテを待っていた。その間に、「市内に偶像がおびただしくあるのを見て、心に慎りを感じた。」（使徒17：16）

知っての通り、パウロは大きな経験を通じて、主が感情も感覚もない無形存在ではなく、近くにいて、パウロに話ことができ、また実際に言葉をかけて彼に何をなすべきかを教えられた御方であることを知った人である（使徒9参照）。パウロが市内におびただしくある偶像を見て心に憤りを感じたのは、このことを知っていたためである。彼は憤りを感じただけではなかった。アテネの市民を目覚めさせたいという望みと、実際に目覚めさせる力と勇気が体内にみなぎるのを感じたのであった。彼は事あるごとに「イエスと復活とを宣べ伝えた」（使徒17：18）。ある者

は彼をおしゃべりと呼び、ある者は「異国の神々を伝えようとしているらしい」と言った（使徒17：18）。そのため、彼は人々の注目を集め、何を言っているのか聞こうとして大勢の人が集まってきた。

「そこでパウロは、アレオパゴスの評議所のまん中に立って言った。『アテネの人たちよ、あなたがたは、あらゆる点において、すこぶる宗教心に富んでおられると、わたしは見ている。』

実は、わたしが道を通りながら、あなたがたの拝むいろいろなものを、よく見ているうちに、「知られない神に」と刻まれた祭壇もあるのに気がついた。そこで、あなたがたが知らずに拝んでいるものを、いま知らせてあげよう。

この世界と、その中にある万物とを造った神は、天地の主であるのだから、手で造った宮などにはお住みにならな

い。

また、何か不足でもしておるかのよう、人の手によって仕えられる必要もない。神は、すべての人々に命と息と万物とを与え、

また、ひとりの人から、あらゆる民族を造り出して、地の全面に住まわせ、それぞれに時代を区分し、国土の境界を定めて下さったのである。

こうして、人々が熱心に追い求めて捜しさえすれば、神を見いだせるようにして下さった。事実、神はわれわれひとりひとりから遠く離れておいでになるのではない。

われわれは神のうちに生き、動き、存在しているからである。あなたがたのある詩人たちも言ったように、「われわれも、確かにその子孫である」。

このように、われわれは神の子孫なのであるから、神たる者を、人間の技巧や空想で金や銀や石などに彫り付けた

◇ ◇

現在がいかに動揺 と悲劇に満ちていよ うとも神が私たちの 天父であるという知 識の中には、慰めと 力がある。

◇ ◇

ものとと同じと、見なすべきではない。』(使徒17:22-29)

このパウロの説教は19世紀も昔に説かれたにもかかわらず、現代の私たちにもよくあてはまる。その間科学と工業に顕著なように、いくつかの分野においてめざましい変化があった。しかし、パウロの説教の主題については、現代世界も当時も大して変わりがない。多くの人にとって神は依然として「知られない神」であり、人々は知らずに拝んでいるからである。神は「人間の技巧や空想で金や銀や石などに彫り付けたものと同じだ」とは恐らく考えられてはいないだろうが、形を変えた迷信、偶像は現代にもまだ生

きている。ある者は電波のように「宇宙に拡散したエネルギー」だと定義する。「最高の大義」、「万人共通の良心」などとも呼ばれる。しかし、人がもしパウロと同じ知識を持ったなら、このようなあいまいな言葉で神を呼ぶことはしないであろう。

しかしながら、今日の世界にもパウロの時代と同様に、神が自分たちの父で自分から遠く離れてはいないことを知っている人々がいる。彼らがこの点について語る時、自分の所有しているものの中で一番貴重なのはその知識だと言うであろう。彼らはそこから、誘惑に対抗する力と、危険に立ち向かう勇氣、寂しい時の友、悲しい時の慰めを得る。神についてのその知識は、あすはきょうよりも良くなるという信仰と希望を彼らに与える。そして周囲のあらゆる人々と物事が混乱と混沌のさ中にあっても、いつも彼らに人生の目的を与える心の錨となるのである。人々がそのような混乱した状態に陥るのは、この知識がなく、神によって導かれていないからであるということを彼らは知っている。

きょう皆さんにお話したいことは、だれでもこの類ない知識の所有者となって、それがもたらす祝福を享受できるということである。パウロが言うように、私たちは、人を偏り見ずにあらゆる人がみもとに来るのをみ旨とされる神の子孫である。神は次のように言っておられる。

「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのものにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。

わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。

わたしのくびきは負いやしく、わたしの荷は軽いからである。』(マタイ11:28-30)

神についてのこの知識を得るための代価は、キリストの「くびき」を負うこと、すなわちキリストの歩まれた道に従うことである。そして、その道に至る門は、神を知りたいという望みであり、大切なのは、知識を得るために必要なことを実行しようという決意を抱くことである。

この知識を得るには、しなければならぬことがたくさんある。それを全部ここで話すことはできないが、第一歩は祈りである。真心から信仰を持って祈った人で、神への祈りが聞かれなかった人はいない。神に関する真実の確かな知識は、この時代に少年予言者ジョセフ・スミスを通じて、祈りの結果として地上に回復された。

現在がいかに動揺と悲劇に満ちていようとも神が私たちの天父であるという知識の中には、慰めと力がある。御父は漠然とした抽象的な遠い存在ではなく、毎日交わりを持つことのできる、近くにおられる愛と理解に満ちた私たちの父である。御父は私たちを強くし、守る力を持って一人一人に手を差し伸べて下さる御方である。

人々がこの知識を得たいという望みと勇氣と謙遜を持ち、この知識の実を受けることができるよう、私は心から祈っている。

「子供をいらだたせては いけない」

F・エンチオ・ブッシャ



妻とふたりでこの人生の様々な責任を重要な順に並べてみようとする時、最初に考えるのは決まって子供たちのことである。長男のマークスは19歳になったばかりで、目下伝道の準備をしている。マーティーアスは17歳で職業教育を受け始めており、ひとり娘のマーヤーは16歳。末のダニエルは12歳で、アロン神権を受けたばかりである。

私たちは子供たちを心から愛し、彼らを私たちに託して下さった天父に深く感謝している。この人生で経験できる最大の喜びは、すべての子供が完全に神の律法に従って生活し、自分の管理の職を全うする幸せな人間になってくれるのを見ることではないだろうか。私たちはそのように考えている。

しかし痛切に感じるのは、人間の心、それも特に若い子供たちの心が繊細なことである。動物の世界では、新しい生命が誕生した時にはすでに必要なものがほとんどすべて備わっており、あとのわずかな部分を本能が補助するだけである。しかし、人間はそうではない。人間の子供は動物などより、養い、世話をする手間が必要であり、霊的、道徳的な成長も全面的に両親に依存している。子供たちに人生の手ほどきをすることが非常に大切なのはそのためである。もちろんそれは長い歳月をかけて、家庭の楽しく愛に満ちた雰囲気の中で、つまりパウロの言うように「すべてを完全に結ぶ帯」(コロサイ3:14)である愛の中で行なうのである。パウロはさらに家庭の理想的な姿について次のように述べているが、これは私たちの好きな言葉である。

「妻たる者よ、夫に仕えなさい。それが、主にある者にふさわしいことである。

夫たる者よ、妻を愛しなさい。つらくあたってはいけな

い。子たる者よ、何事についても両親に従いなさい。これが主に喜ばれることである。

父たる者よ、子供をいらだたせてはいけな

い。心がいじけるかも知れないから」(コロサイ3:18-21)

ほとんどの親は、子供たちが世の中でうまくやってゆけるように、また可能性をいっぱいに開いてやり、いらだたせていじけさせたり無意味な反抗を誘ったりしないように、子供には精一杯のことをしてあげたいと思っている。ところが、サタンは地上で大きな力を振るい、善意の人間の行く手に数多くの障害物を置いた。学校や報道機関は物質主義、憎悪、破廉恥、下劣、不道德、悲惨を助長する教えを説き広めている。それもみなスマートで気の利いた文句にくるんで。この世には誤った宗教や哲学が氾濫し、人を没頭させる娯楽がたくさんある。外面的な環境を改善し、慰めと安らぎのある生活を送ろうとする時には、多くの時間と体力を要するが、人々はその体力と時間を娯楽に費やしているのである。しかも悪いことに、本当に必要なものには少しも気づかぬままに。

すべての人はキリストのみたまの幾分かにより啓発され、良いこと、正しいことの知識をある程度持っている。しかし、実際に家庭生活を清らかなものにしたいという望みを持っている人は数少ない。というのも、予言者ジョセフ・

スミスを通じて回復されたイエス・キリストの福音による完全な知識に欠けているからである。私たち夫婦も、かつてはその状態にあった。

だから、私たちは回復された教えをもって、結婚当初の私たちを訪れてくれた宣教師の、お会いしたこともない両親に深い感謝の気持ちを覚えるものである。末日聖徒イエス・キリスト教会の教会員とその他の人々を区別するもののひとつは、自分が何者で、どこから来て、なぜこの地上にいるのか、そして死んだ後はどうなるかについての確かな知識があること、また当然のことながらその目的を達する力があることである。

この知識があるからこそ、すべての家族のつながりに意味があり、とりわけ自分の子供たちに対して愛と責任を感じるわけである。モルモンの開拓者たちが果てしない荒野に逃れて無人の地に一大文明を築き上げたように、今私たちは霊の砂漠の中に住んでいて、教会社会というオアシスから活気ある国家を築き上げる責任を負っているのである。神権の力がなければ、また補助組織やセミナーのようなプログラムがなければ、私たち親は孤立し、迷ってしまうことだろう。福音の救いの原則を知らないままで親としての責任を果たすということは、考えただけで身の縮む思いがする。

父親あるいは母親であるということは、優先感覚をもって物事を考えることでもある。子供は決して完全ではない。子供に欠点はつきものであるが、あまりに欠点が大きいために親が動転して、「子供をいらだたせる」ような行動をつい取ってしまうことがある。しかしそれをすれば、永遠の生命という最終目的から子供を引き離しかねない。

では、自分の子供の失敗や欠点や過ちには、どう対処したらよいのだろうか。そこが肝心だと思う。ある時私は、ホームティーチングの訪問先で、少年が両親を目の前にして、自分は一度もほめられたことがないと言うのを聞いたことがある。その父親の返す言葉が、「ほめられるような



ことをすれば、喜んでほめてあげたよ」であった。私はショックを受けた。このような言葉は子供にどんな気持ちを起こさせるだろうか。

私たちは人のあまり良くないところに、何と早く気がつくことか。それに引き換え、正しい導き方さえすればこうなるといことをなかなか考えようとしなのはどうか。人は皆、神の清さと徳の貴重な属性に飾られた神の子供なのである。

欠点に一番悩むのは当の本人である。子供は自分の誤ちも弱さも、承知している。悔い改める勇気、引き返す勇気、その勇気を親から与えられなくて、一体どこから得られるというのか。

子供には、霊的に大人になって行く過程で失敗をし、欠点を持ち、たとえ10回正されてもまた良くないことをしてしまう「権利」とでも言えるようなものがあると、私たち夫婦は考えている。また、それを理解し、忍耐し、許すこと、「心がいじけないように」そうしてやるのが親の義務でもあると思っている。そこで私たちは真正正銘の探偵となって、子供たちに隠されている才能や能力を調べ出した。立派な賜を身につける最初のほんの小さな芽を、見て、口に出して、ほめてあげることが必要だからである。家庭の夕べで肩を並べ、そのことを考え、一人一人の良い性格や能力を口に出して言うのは楽しいものである。良い心を伸ばし、失敗したら一緒に悲しみ、永遠に価値のあるものに向かって再出発する目標を心に湧かせてくれる人が、だれにも本当に必要である。

私たちは子供が自尊心、つまり自分には価値があるのだという思いを持つように導き、またほとんどのことについて判断を各人にまかせるよう努めている。子供の過ちを発見して指摘するいわゆる「教師」よりも本人に過ちを気づかせる人の方が良い教師であるということを、私たちは経験から知った。子供が自分で失敗に気づけば、すでに自分が変わるための一歩は踏み出している。

かつてこういうことがあった。悪いことをした息子に自分で罰を決めさせたら、1ヵ月間テレビを見ないことにすると言う。重すぎる罰だと思ったがそうすることにした。すると、彼が祖母のところ遊びに行った時、テレビを見るように勧められても、親にはわからないはずなのにいやだと言って断わったということを聞き、うれしかった。親にとって、子供がむずかしい事態を上手に乗り切るのを見るのは、何よりの喜びである。

人間を最もおびやかす、だめにするのは大人である。悪い手本を見せたり、すねた哲学、偽善的な人生哲学を吹聴したりする一部の大人である。汚れなく無邪気な子供たちを見るのは、人間の起源の神聖なことの何よりの証拠である。にもかかわらず、その傍らにいる親が感受性に欠け、愛に欠けるのを見るのは、実に心を暗くすることである。

よくよく考えてみれば、子供を正しく導き育てるという責任は、よい模範に、またよい友になるために霊的で汚れのない献身と愛を持とうと毎日自分自身と闘う、その闘いと同じである。親である私たちは途中でさえぎらず、身を

入れて意識的に話を聞くようにすれば、その度合に応じて、教えるのが簡単になる。

私は教会のある指導者が、自分の家に入る時、必ず心の中で、父親、夫として自分の責任を正しく完うすることができるようその力を祈り求めると言うのを聞いたことがある。

毎日のささいないらだちを賢明に超越することは容易なことではない。聖典の勉強が日常の習慣になり、どんなに小さなことでもみたまの導きを受けて決定することが身につけているのであれば、この問題の克服はほとんど不可能に近いことがわかった。また。私たちは特別な家庭の夕べというものを経験した。その時の具合いで、計画とはまるで違った家庭の夕べをしたのである。家庭の夕べをただのプログラムと考えるのは何と危険なことか。場所を変えたり、順序を変えたり、家族に何かびつくりさせる時間を設けたり、目標をひとつにしぼったりする。こうして、参加する家族にさらに大きな愛と希望と信仰を与えるようにするとよい。

私たちは、子供たちが計画や準備に参加すると家族の霊性が高まるのを経験した。また、家族会議は家族を組織し整えるのに格好の場である。一例をあげれば、みんなで集まって家族会議を開いた時に、家族の生活をもっと改善し、みんなの愛を深め、もっと楽しい家庭にするにはどうしたらよいかについて話し合ったことがあった。ひとつの問題は朝の家族の祈りである。愛と気持ちはあっても、私たちがいつもねばけまなこで、用意もせず、心を集中できない状態で集まってくるようではよくないということになった。そこでみんなで考えて、いつもより15分早く起きることに決めた。また、ひざまずいて祈る前に、みんなで讃美歌を歌い、聖典か教会幹部の話と一緒に読むことにした。

この方法は、子供たち自身の決意があって、家族の大きな喜びの源となっている。私たちは霊に栄養を与え、生ける水の泉によって強くされてから、ひざまずいて、大切なこと、忘れてはならないことを考え、感じ、受け入れるのである。そのような祈りを行なって、日々のチャレンジに立派に応える力をみたまを通じて与えられることは、本当に大きな祝福である。

末の息子が、母親に言われもしないのに、私にお休みのキスをして「お父さん、大好きだよ」と言うのを聞くと、感謝と誇りを感じる。また、娘がにこにこして幸せそうなのを見る時や、17歳の子の顔に私たちに対する信頼を読み取る時、長男の口から私たちを信じ切っている言葉を聞く時も同様である。

私たちは親として最高の祝福を経験している。つまり、新しい生命と新しい希望を創造し、育てていく神の協同者であるということである。

(F・エンチオ・ブッシャ　ドイツの印刷出版会社社長。十二使徒評議員会地区代表。ドイツ・デュッセルドルフステキ部ドルトムントワード部所属)

ジョン・ロイド・スチーブンスと マヤ遺跡

ジェームズ・S・バック

二 ユーヨークの弁護士ジョン・ロイド・スチーブンスとジョセフ・スミスは全く面識がなく、スチーブンスがモルモン経を読んだという証拠もない。そのスチーブンスが残した生涯最大の業績が、同じくニューヨーク人であるジョセフ・スミスの翻訳したあの靈感の書を、後になって証明するものとなった。

その業績の発端は、1839年11月のむし暑いホンジュラスの密林であった。ジョン・スチーブンスと原住民のふたりのヘルパーが、森の台地から一個の彫像を掘りあてた。スチーブンスはこう書いている。「フランシスコが足を見つけ、ブルノーが体の一部を見つけた。大発見だ」ビクター・W・フォンハーゲンは、「新しい分野、新しい科学、つまりアメリカ考古学が誕生した」とその日のことを記している。ジョン・ロイド・スチーブンスがその生みの親であった。

旅行家としても名声の高かったスチーブンスは、それまでにヨーロッパや近東、エジプト、アラビア、聖地を訪れ、数々の書を残していた。過去の幻を求めて止まない彼であったが、まだ自分の本当の使命は知らなかった。

スチーブンスが初めて自分の将来を見いだしたのは、ロンドンに立ち寄り、パレンケというメキシコの不思議な廃墟を訪れたキャプテン・デルリオ著の「ある古代都市を見

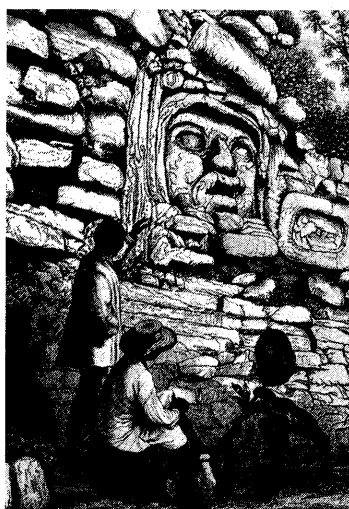
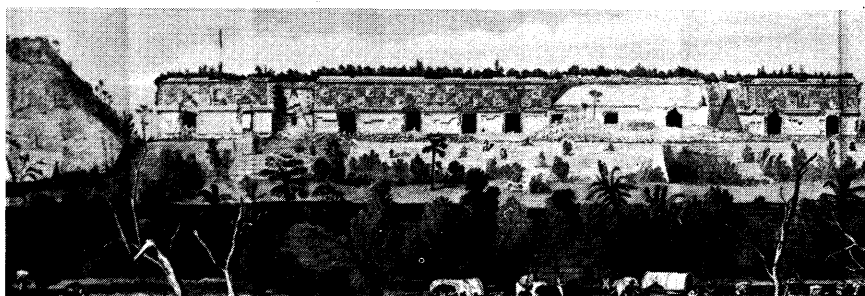
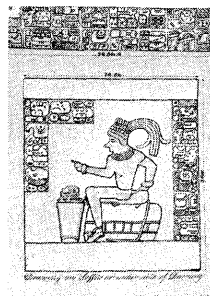
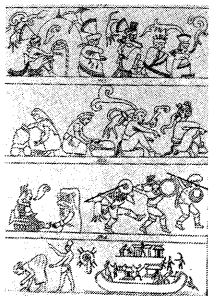
て (Descriptions of an Ancient City)」という本を手にした時である。また後には、第二の失われた町ウズマルのことをも学び、1835年にはホンジュラスの廃都コパンを紹介した専門誌に真っ向から異議を唱えた。

パレンケ、コパン、ウズマル。今や彼の心は、昔中央アメリカに存在した漠たる文明の幻に取りつかれてしまった。しかも驚いたことに、そのような関心を抱いたのは彼ひとりであったようである。「コパンの論文に世間はあっと驚くと思ったが、案に相違してさっぱり反響がない」と彼は書き残している。それでもなお彼は、それらの廃都を捜してみせると宣言した。

学者や大衆は声をそろえて「くだらない！」と叫んだ。インディアンは未開の域を出ておらず、当時のアメリカ人は、征服の結果得た数々の証拠品を見てさえ、ほかはともかく「インディアン」の文明などは信じようとしなかった。証拠品は無視されるか、スペイン人の宣伝話だといって相手にされないかのどちらかだった。学者や歴史家はかたくなに昔ながらの通説を守り、スチーブンスの行なっていることを嘲笑するばかりだった。

しかし、そうした学者たちの説に対抗する文書がほとんど出ていなかったことは事実である。例に取れば、ジョセフ・スミスの悪口を言う人々はモルモン経を盗作だと非難したが、盗作されるような内容の本は何ひとつなかった。1839年になっても、博学で財産があったスチーブンスでも古代アメリカ文明を物語る証拠を集めるのは非常に困難であった。彼の乏しい資料は具体性に欠けていた。また、ジョセフ・スミスの時代には記録はお粗末で、皆無と言ってもよいほどであった。

情報不足に、血気はやるスチーブンスも少々懐疑的になったが、彼には高い望みがあった。彼は名の知れた画家でもある血縁のフレデリック・カサウッドを伴い、中央アメ



リカに向けて船出した。

最初の目的地コパンは、土壁の小屋が立ち並ぶ陰気な村であった。しかし発見は間近に迫っていた。原住民のガイドは密林を抜けてとある川岸へ彼らを案内した。対岸には30メートルもの高さの石壁がそそり立っていた。それが古代コパンの外郭であり、史上の新時代の始まりであった。一行はさっそく川を渡って壁をよじ登り、忘れられた文明の廃墟に足を踏み入れた。

スチーブンスは記している。「厚い密林をかき分けて進むと、5メートルほどの高さの方形の石柱に出くわした。……4面全部にきわめて明瞭な浮彫りの彫刻があり、……芸術品だ……エジプト最高の遺跡に匹敵するものもある。

アメリカは(1830年代の歴史家たちによれば)野蛮人が住んでいたというが、野蛮人にこのような建築ができるはずがない。野蛮人がこのような石に彫刻を残すはずがない。インディアンにだれが作ったのか聞いても、『キエン サベ』(だれも知らない)とさえない返事だった。』

西の世界の学者や歴史家も、その程度の解答しかできなかった。コパン、そしてマヤは、ヨーロッパが暗黒時代に陥っていた時期に、高度の芸術、文化を咲かせていたのである。彼らは密林を征服し、首飾りに散りばめたまばゆい宝玉のように、ユカタン全土に彼らの都市をつないで行った。しかしその偉業も歴史も、旧世界の人々に対して彼らの住んだ静寂の密林さながら沈黙していたのである。

紀元900年以前に、マヤ人は歴史の舞台から突如として消えた。以来1千年、1839年にスチーブンスとカサウウッドが足を踏み入れるまで、コパンはホンジュラスの厚い密林に埋もれていた。

ふたりは全容を見ることができなかった。密林があまりに深かったせいである。そこで埋まっていない「偶像」とも思われる石柱に目をつけた。それらは30トンもある巨大

な一本柱で、人物や花や動物がびっしりと彫られていた。何かの行事を記念する定まった日に建てられたもので、マヤ人の才知の結集であった。

スチーブンスとカサウウッドは2年に及ぶ旅行で、コパン、パレンケ、ウズマル、チチェンイツァ、その他40にもものぼるマヤ遺跡を発見した。

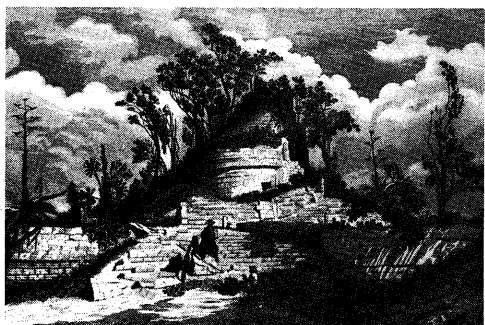
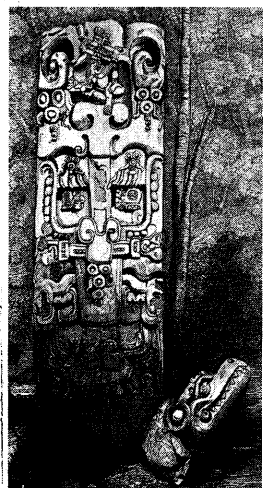
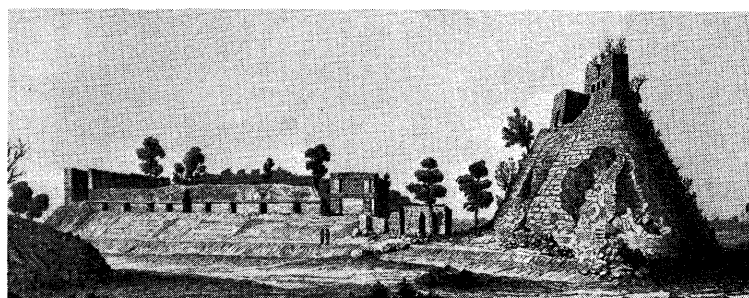
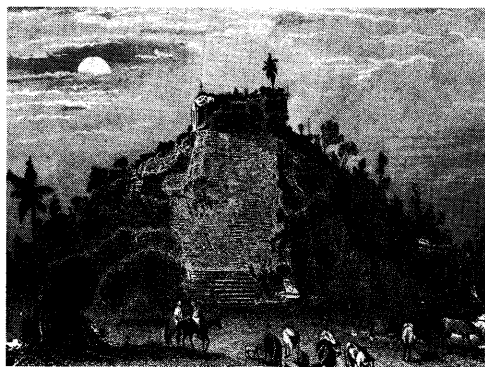
謎は深まるばかりで、スチーブンスはますますそのとりこになった。彼はパレンケについて次のように言っている。

「洗練された高い文明を持つ特別な民の遺跡であった。国の興亡の全舞台を過去に終えて、自らの黄金時代を登りつめ、そして滅びて全く忘れ去られた民。人類家族と彼らを結ぶ鎖が冷酷にも断ち切られて、これだけが地上に残した彼らの足跡を伝える形見だった。……かつての華やかな美しい都市が崩れて荒廃し、忘れ去られて、やがて周囲を何マイルも木々が包み囲んで、区別する名さえも持たない姿で、偶然に発見されるとは、豊かな空想の世界へと私たちを導く世界の歴史の中でも、これほど私の心を強くひきつけるものはない。」

その神秘のベールをはがすふたりの探検家の情熱に、現代人はかぶとを脱ぐ。気楽にくつろいだ生活をするのが紳士であったこの時代に、ふたりは飢餓やマラリヤに脅かされ、無数の昆虫の襲来や不便な生活に耐え、死と隣り合わせの状態にあったのである。何のためであろうか。

歴史はスチーブンスを偉人にした。彼の功績は、ロゼッタ石のシャンポリオンやトロイ遺跡のシュールマンに匹敵する。

私たちの目から見れば、スチーブンスの貢献は重要である。ジョン・ロイド・スチーブンスとジョセフ・スミスは一度も会うことがなかったが、荒野に叫ぶモルモン経の声は、地上から一掃されたリーハイの民を物証するスチーブンスの発見によって、一段と力を増したのである。



絵は英国の画家フレデリック・カサウウッドの筆になるもの。彼はジョン・ロイド・スチーブンスに同行して、チアパス、ユカタンに点在するマヤ民族の廃墟を調査した。

金融業者と バンカー監督

ウィリアム・ハートレー

「忘れないで下さい。きっかり5分間ですよ」と接客係は念を押した。こう言われてから、ソルトレーク・シティーの実業家ニーファイ・L・モリス氏は、大金融業者トーマス・N・マコーリー氏の豪勢なシカゴ営業所の一室へ案内された。接客係はこの人物に訪問客の名刺を手渡すと、入口の所に立って、5分間という制限時間は延長できないからと再度念を押した。

「ソルトレーク・シティーからですね」と忙しいはずのこの取締役は切り出した。「どうぞお掛け下さい、モリスさん。ユタからいらしたのであれば、私が何年も前にそのユタで経験したことをお話ししましょう」マコーリー氏は、モリス兄弟がどんな業務で訪問したのか尋ねようともせず、ぎっしりと詰まった業務のスケジュールを無視し、心配顔の接客係をも無視して、1時間もの間、彼の懐かしい体験談をしゃべりまくったのである。

マコーリー氏の話はこうである。彼は今世紀に入る前、すでに年若くして東部で一財産を築き上げていた。しかし、仕事のストレスがたまり、遂に健康を害してしまった。医者は、この青年実業家が健康を回復する唯一の望みは、6ヵ月から1年の間、西部の広々とした土地で過ごすことにかかっていると言う。そこで不承不承この勧告を受け入れたマコーリー氏は、彼の大規模な事業を同僚に譲り渡すと、医者を伴って西部へ出かけた。

数ヵ月間、ふたりは幌馬車の中で野宿し、時の流れに身を任せてロッキーの山岳地帯を旅して歩いた。そのようにして回復の見通しが立った頃、マコーリーは突然39度の熱を出し、ひどい悪寒に襲われた。医者は、患者の生命に危惧を抱いて、最も近い開拓地であるネバダ州のバンカービルまで馬車を走らせた。そこは、ユタの南西部の端に近い、小さなモルモンの開拓地であった。モルモンに対して一方ならず嫌悪感を抱いていた医者ではあったが、この度だけは、自尊心を捨てて、エドワード・バンカー・ジュニアという地方の一農夫の家へ助けを



求めて飛び込んだ。この人は、やがてこの町の監督であることがわかるのだが、バンカービルという町の名前はこの人の父親の名前をとって付けられたものであった。

ふたりの旅人は、この人の家が度々、この不毛地帯を旅する人々のために病院になったりホテルになったりしていたことを知らなかった。1883年から1908年まで監督でいる間に、バンカー兄弟は地方医としても働いていた。その間、40本にも及ぶ骨折を直し、指の切断手術をし、傷口を切開し、一度は、草刈機で切断された男の子の足の縫合手術に成功したこともあった。その地方の言い伝えでは、バンカー家族が家族水いらずで食事をすることはめったになかったと言う。良い監督は人々を親切にもてなすものであるという教えのためであった。バンカー家の家訓では、旅人は、自分がいたいだけバンカー家に留まることができた。しかし、旅人も家族の一員のような扱いを受け、通常家庭生活を妨げてはならないことになっていた。

東部からの客人は、すぐさま歓迎を受け、その小さな田舎町でできる限りの便宜を図ってもらえることになった。幌馬車と馬の面倒も見てもらった。食糧も与えられ、寝具も生活用品も整えられた。こうして、バンカー家の客間は、にわか造りの病室に改造された。

毎日毎日、医者とバンカー家族は、細心の注意を払って、生死の境をさまよう患者の看護にあたった。数週間たったが、マコーリーの容態は、多少持ち直したただけであった。医者は、この病人に付き添ったが、ひとりきりになることもあった。しかし、マコーリー青年は、ベッドから抜け出すこともできない有様であったので、この謙遜な末日聖徒の家族の日常活動をつぶさに見るまたとない機会を得た。

時々、客間のドアが半開きになっていたため、マコーリーは隣の部屋の様子を見ることができた。そこでは、一日のつらい農作業を終えた後、家族が夕食を祝福し、そして食べていた。また夕方には、家族がそろってひざまずいて祈りをささげている光景を何度も目にした。監督がひとりで声を出して祈っていることも度々であった。

こうしてやっと患者の病状も回復し、医者から旅行再開の許可をもらえるほどになった。医者とマコーリーが出発する日の朝、バンカー家の家族は皆、いつものように早く起きた。しかしその時、客人の眼をも覚ましてしまったことには気が付かなかった。そのため、ふたりは思いがけず、家族がふたりのために特別な祈りをささげているのを耳にしたのである。家族が皆食堂に集まり、屈強な監督が、いつものように謙遜に子供たちのわきにひざまずき、心を込めて敬虔な祈りをささげた。特に監督は、客が十分な健康を取り戻せるよう祝福して下さったことに対して神に心からの感謝をささげた。そして更に、病気が完治するよう特別の祝福を祈り求めた。

祈りの最中に、マコーリーは、友人の医者がほおに涙しながら客間から静かに抜け出して行くのに気が付いた。自分のためにいかに大きな信仰の力が働いているかを知ったマコーリーも、涙が流れ出てくるのをおしとどめることはできなかった。深い感謝の念が胸の中に湧き上がってきたのである。後年、彼がモリス兄弟にこの話をした時、「私は生涯を通じてあのような祈りは耳にしたことがない」と述懐している。

祈りを終えて立ち上がると、家族は、いつもの作業に取り掛り始めた。バンカー監督だけは、客人に別れのあいさつをする

ために客間へ入って来た。監督はマコーリーと握手をすると、この東部の人間に向かって、知り合う機会を得たことに心からの感謝の念を表わした。そして、彼と医者に楽しい旅行を続けて欲しいと言った。

「バンカー監督、私はあなたに随分借りを作ったようですね。相応のお礼はするつもりでいます。皆さんが本当に親切に私の面倒を見て下さったおかげで、命が助かったんですから。私には資産がたくさんありますから、十分なお礼ができると思います。」

彼はバンカー一家の生活が余り豊かでなく、物資に事欠いていることを知っていた。だが驚いたことに、監督はその申し出を丁寧に断わった。「いえ、あなたから何もいただくわけにはいきません。私は、自分の兄弟に当然するはずのことをしただけなんですから。」

「でも、私はあなた方からこれだけのことをしていただいたんですから、何かしらお礼をさせていただきませんか。何もお礼をしないというわけにはいきません。お金でも、何でもいいですから、私にできることを教えて下さい。」

手厚いもてなしをした監督はこの申し出にこう答えた。「私はあなたのお役に立てただけで、もう十分に報いを受けています。私に何か支払いたいとおっしゃるのなら、同じような助けを必要としている人々に、私があなたに快くして差し上げたように、あなたもしてあげて下さい。それだけです。」

バンカー監督とのやり取りはこれで終わった。

しかし、マコーリーは自分には借りがあると思い、決してこのことを忘れなかった。そして、それから後、何年間にもわたってこの借りを返し続けた。末日聖徒を援助したのである。ユタでブリガム・ヤングの記念碑を建てるために、その寄付の話がもち上がった時、マコーリーは真っ先に1,000ドルの寄付をして献金者名簿の筆頭に彼の名前が掲載された。ユタ州選出の上院議員リード・スモートの議員資格が合衆国上院で争われた時、政界にも影響力を持つこの金融業者は、ウィリアム・ハワード・タフト副大統領に直接働きかけて、モルモン擁護のために尽力した。彼はまた、ユタ州や教会の数多くの人々のために、財政面で数々の援助をした。ふたりの著名なモルモンが、1907年の大恐慌で多額の負債を抱え込んだ時、マコーリーはふたりに約束手形を返し、自分に対する負債を帳消しにした。

そして機会さえあれば、たとえ5分間の面会時間が1時間の話し合いになろうとも、モリス兄弟のように、ユタから来た人物には、この話をするのが義務のように感じていた。ユタから来た人々は、残らず、彼がネバダの辺境地帯で死の苦しみ遭遇したこと、そしてモルモンの監督に出会い、その監督が見知らぬ旅行者であった彼の回復を願って神を信ずる信仰を示してくれたことなどの話を聞くのであった。マコーリーの説明によれば、そのような信仰は、彼の全財産と権力をもってしても、決して手に入れることのできないものであった。

この話に心を動かされたモリス兄弟は、早速それを書きとめた。それから20年後の1943年、モリス兄弟は、バンカー監督の子孫に手紙を書いてこの話を伝えた。監督の子孫にとって、この話は家族に誇りと靈感をもたらす源となっている。

長老見込み会員 に訴える



十二使徒評議委員会会員
ボイド・K・バックー

戻って来さえすれば、すぐにも、
道からそれていたことも忘れて
働くことができる。

兄弟姉妹の皆様、この集会の最後には、キンボール大管長がお話することになっている。この集会が始まる前に、3種類の長さの話を用意してあることを大管長に話しておいたところ、今、歌っている最中に、一番長い話を使うようにというメモをいただいた。

私はコロラドでの経験を思い出す。ステーキ部を再組織した時のことである。集会も終わりに近づいて、残り時間も10分ほどになった。しかし、大管長も私もまだ話していなかった。ステーキ部長は、次の話者として私の名前を公表した。キンボール大管長はいすに寄りかかったまま、私に、「どうぞ、残りの時間を全部使って下さい」と言われた。

私は、1分間だけ証を述べて席に戻った。ステーキ部長がキンボール大管長の名前を公表している時、私は大

管長が何かメモを書いているのに気付いた。大管長は立ち上がると、私にそのメモを手渡した。そのメモには、「従うことは犠牲にまさる」と書かれていた。そのために今日は、大管長の言葉に従って話を進めたいと思う。

兄弟姉妹の皆様、この素晴らしい総大会も閉会に近づいたが、私たちの心は、数々の説教に深く動かされ、徳高い思いへと駆り立てられた。同時に私は、その間ずっと、そうした大切な霊的影響を受けずに生活している人々のことに思いをめぐらしていた。

そうした人々の中には、教会員も大勢いる。人の生活にとって極めて重要なはずの霊的成長というものを十分に遂げていない、長老見込み会員と呼ばれている人々である。

長老の職は、尊厳と誉れの召しであり、霊的な権威と権能の召しである。「見込み」という言葉には、希望とか樂觀とか可能性とかいった意味合いが感じられる。今日、私はそのような人々にお話したい。しかし恐らく、この話が当てはまる人々は他にもいることだろう。

こう言っては間違っているだろうか。皆さんは折に触れて、心の奥底で教会に戻りたいと切に願っていると。ただ、どのようにその道を歩み始めたらいいのか、よく知らないのである。また、深く考えるたびに、心の中でこんなことを思っているのではないだろうか。

「道をそれさえしなかったらなあ。」
「もっと若い頃に機会が与えられていれば……。」

「失敗し過ぎた。」

「もう手遅れだ。」

「過ぎてしまったことが多過ぎる。」
教会に戻りたいと願っている皆さんの心の中を、「いや、難し過ぎる。第一歩がなかなか踏み出せない」という思いがよぎるかもしれない。

私は、ある体験から極めて重要な教訓を得たが、そのような教訓をもっと若い頃学んでおけばよかったと思ったものである。ところが、先週日本を訪問した折に、私はまた同じような体験をした。そのため、私はこの体験について総大会で話をしようと決心した。

第二次世界大戦中、私は空軍のパイロットだった。太平洋諸島での任務を終えた後、私は進駐軍として、1年間日本で過ごした。片言の日本語でも覚えた方が便利なことは言うまでもない。少なくとも方向を尋ねることと食べ物を買うことだけはできなければならな

かった。

私は、平常のあいさつの言葉と、数字を少し覚えた。そして、他の多くの教会員と同様、非番の時は日本人たちの間で伝道活動を行なった。私は、日本人からも少し言葉を教えてもらったが、随分難しい言語だと思ったものである。

1946年7月、最初のバプテスマ会が大阪で開かれた。佐藤龍猪兄弟と姉妹がバプテスマを受けた。ふたりにレッスンをしたのは大部分他の軍人であったにもかかわらず、佐藤姉妹にバプテスマを施す特別な機会が私に与えられた。

私たちは、日本にすることが別段つらかったわけではないが、私たちの心をいつも捕えて離さないことがただひとつあった。それは故国のことである。私は当時、既に4年近くも国を離れていた。戦争も終わり、ただただ帰国の日を待ち望んでいたのである。

ようやく帰国の日がやって来た時、私は、二度と日本へ戻ることはあるまいと思った。私の「日本の部」はそこで幕を閉じたのである。

それから数年間、私は勉学に励み、家族を養うことに奔走した。私の近辺には日本人はいなかったし、やっと覚えた片言の日本語も使う機会はなかった。はるかに遠い過去のものとなってしまい、26年という歳月のおかげで忘却のかたへ完全に消え去ってしまったものと私は思っていた。そんなある日、日本を訪問する責任が与えられた。

東京に着いた翌朝、私がアボ伝道部長と伝道本部を出ようとしていると、日本人の長老がやって来て、アボ部長に日本語で話しかけた。アボ部長は、急用ができてしまったので、ちょっと出かけるのが遅れることになるかとわびた。

アボ部長は、その長老と一緒に書類に目を通し、日本語で何か話し合っていた。それから、書類を一部手に取ると、ある文を指してこう尋ねた。

「これは……。」

私は、アボ部長がその言葉を言い終わらないうちに、自分の心の中でちゃんと最後まで言っていたのである。

「コレハナンデスカ」と。26年も経ってから、しかも日本に来てまだ一晩にしかないというのに、「コレハナンデスカ」という一文が、私の心の中に戻ってきたのである。

私は、26年間その言葉を使ったことがなかった。二度と使うことはある

まいと思っていた。しかし忘れ去ってはいなかったのである。

私は日本に10日間滞在し、福岡で旅程を終えた。福岡を出発する朝、私たちは渡辺兄弟姉妹と一緒に車で飛行場へ向かった。私は、渡辺家族の子供たちと一緒に後ろの座席に座って、長い間忘れていた日本語を練習していた。子供たちは、喜んで私に新しい日本語を教えてくれた。

その時私は、26年前に覚えたかわい歌を思い出したので、子供たちに歌って聞かせた。

モモタロウサン モモタロウサン
オコシニツケタ キビダンゴ
ヒトツ ワタシニ クダサイナ

私の歌を聞いて、(タバナクル聖歌隊指揮者の)オットリー兄弟が居ても立ってはいられない気持ちになっているのではないかと思う。

渡辺姉妹も「私もその歌を知っています」と言った。そこで、私たちは一緒に声をそろえて、子供たちに歌って聞かせた。それから渡辺姉妹は、その歌詞の意味を説明してくれた。そしてその説明を聞いているうちに、私自身もその意味を思い出していた。

これは、子供に恵まれない日本人老夫婦の物語である。子供が欲しいと願っていると、ある日、大きな桃が流れて来て、その中から男の子が生まれ、その子に桃太郎と名付ける。そしてその桃太郎が、恐ろしい鬼の手から人々を救い出す英雄談と話が続くのである。

私はその歌を26年もの間覚えていたわけであるが、私自身、自分が覚えていようとは夢にも思わなかった。その歌を自分の子供たちに歌って聞かせたこともなかったし、その話をしあげたこともなかった。26年という歳月の中で、他の事に心を奪われ、その話のことはすっかりかなたへ退け去ってしまったのである。

私は、その経験が極めて重要なものであると思ったし、また最終的には、良いもので忘れ去られるものは何もないということも認識した。ひとたび日本語を話している人々の中へ戻ると、自分が以前記憶していたものが皆戻って来たのである。しかも、極めて速やかに戻って来たのである。そしてそれから、私の語彙を増やすことは、以前よりはるかに容易になった。

無論私は、こうした経験ができたからといって、自分が鋭敏な頭脳の持ち主であるとか記憶力が抜群などと申

し上げる気持ちは毛頭ない。だれにでも当てはまる人生の原則の一端を紹介したまでである。この原則は、私の兄弟である長老見込み会員の皆さんにも、また同様の立場にいる他の人々にも当てはまる原則なのである。

霊的な真理が語られている環境へ戻ってくるならば、皆さんがもう忘れていたかと思っていたことが、心の中に、洪水のようにどっと押し寄せてくることであろう。長い年月にわたって活動停止状態にいたためにはるかかなたへ追いやられていたものも、再び現われてくることであろう。また、それを理解する力もよみがえるであろう。

御存知のように、「よみがえる」という言葉は、聖典で度々用いられている。

もし人生の進路を再び聖徒たちの中に向けるならば、程なくして、靈感あふれる言葉を再度理解するようになるであろう。そして、皆さんが想像するよりもはるかに速やかに、今まで道それたことがなかったかのように感じてくることであろう。このことを理解することが、皆さんにとってどれほど大切な、よく考えていただきたい。

私がニューイングランド伝道部の伝道部長であった時、ある宣教師大会に出席した。私たちが、若い長老たちの待っている部屋へ入って行くと、ひとりの長身の老人が後方の席に座っているのが目に入った。

その老人は私に、「私はほんの数日前にバプテスマを受けました。私は74歳ですが、やっとのことで福音を見いだしたのです」と言ってきた。

そして、訴えるような声で、その集會に出席してよいか尋ねた。「ここにいて勉強したいだけなんです。一番後ろの列に座っています。じゃまはしませんから」

それから彼は、涙を流さんばかりに、自分が落胆していることを話してくれた。「どうして今の今まで、福音を見いだせなかったのか。私の人生はもう終わりです。子供たちは皆、大きくなって私の手を離れていますし、私はもう、福音の勉強をするには年を取り過ぎています」

再三再四起きる偉大な奇跡のひとつは、教会に入る人々(あるいは、教会に再び入って来る人々)が、日々変わり、成長することである。このことを彼に話す機会を得たことは何とも大きな喜びであった。世にある人、世のものとなっている人々を宣教師たちが捜

し出す。すると彼らは世にあっても、世のものではなくなるのである。極めて速やかに、思想の面でも、感情の面でも、行動の面でも、まるで生涯、教会員でいたかのようになるのである。

これが、この業に伴う偉大な奇跡のひとつである。主は償いと祝福の道を備えておられる。主の伝達の過程は決して冗漫なものではないし、日本語や英語に限られたものでもない。

神聖な変化というものが、これを通して、純粋な英知が私たちの心の中に運び込まれる。そして、他の方法で学ぶには随分時間がかかるようなことでも、瞬時に知ることができるようになる。主は、靈感あふれる言葉を私たちの心に吹き込まれる。しかも、私たちが謙遜で、道を求めている場合はなおさらである。

私たちは世界中の教会を訪問旅行し、ステーク部長や教会の指導者にいつも会うが、そのたびに、彼らが福音を完璧なまでに把握し、教会の諸手続きと諸原則に精通していることを知って喜びを覚える。また、そのような人々にも不活発であった時期のあることを知って驚くことがよくある。時には随分長い間不活発であった人もいるし、また、つい最近教会に加入したばかりの人もいることを知り、驚くばかりである。

そうした過ぎ去った歳月を、私たちはむだな時間と考えがちだが、多くの教訓に恵まれる時間でもあるし、時には、非常に得難い教訓を得ることもある。だが、そうして得た教訓も、霊的な生活という光で照らしてこそ、初めて意味を持つものなのである。

皆さんは、「ぶどう園の労働者のたとえ話」を読んだことがないかも知れない。そのたとえ話の中から引用してみたいと思う。

「天国は、ある家の主人が、自分のぶどう園に労働者を雇うために、夜が明けると同時に、出かけて行くようなものである。

彼は労働者たちと、一日一デナリの約束をして、彼らをおぶどう園に送った。それから九時ごろに出て行って、他の人々が市場で何もせずに立っているのを見た。

そして、その人たちに言った、『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。相当な賃銀を払うから』。

そこで、彼らは出かけて行った。主人はまた、十二時ごろと三時ごろとに

出て行って、同じようにした。

五時ごろまた出て行くと、まだ立っている人々を見たので、彼らに言った。『なぜ、何もしないで、一日中ここに立っていたのか。』

彼らが『だれもわたしたちを雇ってくれませんか』と答えたので、その人々に言った、『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい』。

さて、夕方になって、ぶどう園の主人は管理人に言った、『労働者たちを呼びなさい。そして、最後にきた人々からはじめて順々に最初にきた人々にわたるように、賃銀を払ってやりなさい。』

そこで、五時ごろに雇われた人々がきて、それぞれ一デナリずつもらった。(マタイ20:1-9)

一デナリという賃金は、すべての労働者にとって十分な報酬である。朝早くから始めた人々にも、また遅く来た人々にも、同様に支払われることを主に感謝する。日の光栄の王国では、場所が足りないということはない。すべての人のために場所が用意されているのである。

この世で、私たちは絶えず競争心をあおり立てられるような状況に直面している。勝者になろうとして、互いに敵意をむき出しにしてぶつかり合う。そのうち、私たちは、勝者がいれば必ず敗者もいるものと信じ込むようになる。しかし、そう信じたら道を誤まる。

主の目から見れば、私たちはひとり残らず勝者になることができる。しかし、勝者となるために一生懸命努力しなければならぬことは事実である。主のみ業の中で競争があるとすれば、それは他人との闘いではなく、過去の自分との闘いなのである。

それはたやすいことではない。私は、見かけだけの変化のことを言っているのではない。内部から変わることを言っているのである。それは、たやすいことではない。しかし、できないことではない。すぐにでもできることなのである。

先に引用したたとえ話にはまだ続きがある。たとえ話の後半の部分は、恐らく、現在教会で活発に働いている私たちのことを指しているのであろう。1、2節、前に戻ってから、後半の部分を読んでみよう。

「さて、夕方になって、ぶどう園の主人は管理人に言った、『労働者たちを呼びなさい。そして、最後にきた人々からはじめて順々に最初にきた人々

にわたるように、賃銀を払ってやりなさい。』

そこで、五時ごろに雇われた人々がきて、それぞれ一デナリずつもらった。ところが、最初の人々がきて、もっと多くもらえるだろうと思っていたのに、彼らも一デナリずつもらっただけであった。

もらったとき、家の主人にむかって不平をもらして、

言った、『この最後の者たちは一時間しか働かなかったのに、あなたは一日じゅう、労苦と暑さを辛抱したわたしたちと同じ扱いをなさいました。』

そこで彼はそのひとりに答えて言った、『友よ、わたしはあなたに対して不正をしてはいない。あなたはわたしと一デナリの約束をしたではないか。』

自分の賃銀をもらって行きなさい。わたしは、この最後の者にもあなたと同様に払ってやりたいのだ。

自分の物を自分がしたいようにするのは、当りまえではないか。それともわたしが気前よくしているの、ねたましく思うのか。』

このように、あとの者は先になり、先の者はあとになるであろう。(マタイ20:8-16)

皆さん方長老見込み会員の兄弟たちには、私たちが皆さんのためにいかに一生懸命に働いているかを知っていただけたらと思う。皆さんが、神の王国である教会へ戻り、再び靈感あふれる言葉を語ることができるよう、私たちはどれほど切に祈っていることか。そうした空白の期間が2年であろうと26年であろうと、生涯にわたるものであろうと、変わりはない。再び繰り返そう。皆さんは、すぐにでも、今まで道をそれたことがなかったかのように活動できるのである。

また皆さんは、もうひとつのことを思い出すことであろう。私たちは啓示により、この世に生を受ける前にも生きていたことを知っている。私たちはこの世に生まれる前に得た経験に頼ることもできるのである。

私たちは神の子供である。私たちはこの世に生まれる前に、神と共に住んでいた。私たちは、肉体を受け、試されるために、神のみ前から来たのである。

その中には、既に道をそれて、神の影響からはるかに離れてしまっている人々もいる。そして、神のことは忘れてしまったものと思い込んでいる。時には、神の方でも自分のことを忘れて

しまっているのだらうと思ひ込むことさえある。

しかし、私が26年間忘れていた片言の日本語を思い出したように、皆さんが子供の頃に学んだ正義の原則は、皆さんから離れずにいる。

そしてまた、神のみ前で学んできたものの中には、靈感あふれる言葉がささやかれた瞬間によみがえって来るものもあるであろう。その時には、昔懐かしいものを学んでいることに気づき、感動を覚えるのである。

自分の生活にそのような変化を生じさせることに、最初のうちはためらいがあるかも知れない。しかし、すぐにそのためらいは消え、間もなく神の王国であるこの教会にすることに、何の違和感も覚えることなく、解け込むことができるであろう。さらに皆さんは、教会でどれほど必要とされているかを知り、また皆さんの体験談が、他の人々を救う上でどれほど力強いものとなるかを知ることであろう。

私の兄弟である長老見込み会員の方々に、そして同じような立場にある方々に証し上げる。イエス・キリストの福音は真実である。そして、数知れぬ人々が、神権ホームティーチャーや扶助協会の姉妹、監督やステーク部長、定員会指導者が、皆、神の靈感を受けた声で呼びかけている。このように、教会の指導者として召されている人々の声は、ちょうどダビデが、わがままな息子アブサロムに「わが子よ、帰って来てくれ」と叫んだように、皆さんに向かって呼びかけているのである。

願わくは、父親でありながら、家庭の中に靈感による導きを取り入れている人々が、長い間の荒野の生活を終えて再び戻り、そして靈感あふれる言葉を語ることができるように。また、私が証し上げたように、神が生きておられることを知っていることと証することが可能となるように。イエス・キリストのみ名により祈るものである。アーメン。

☆

☆



モルモン経の英雄たち

モ ルモン経には、イエス・キリストへの

深い信仰をもっていた人々がたくさん登場します。その人たちは危険な目にもありましたし、むずかしいことも行なわなければなりません。次の話はだれのことを述べているのでしょうか。()内の聖句を見て答えを合わせてみましょう。

1)この人はバベルの塔が建てられた時代に住んでいました。主から船を造り、約束の地へ行くよう命じられました。船はできあがりでしたが、中には明かりがありません。そこで小石を16個持ってきて、これに手をふれて、明かりにしてくださいと、主におねがいしました。この人はだれでしょう。(イテル3:6)

2)この人は、ニーファイ人の自由のために戦った2千人の若者のリーダーです。この若者たちは母から、信じて行なえば、神は守ってくださると、教えられていました。そして、戦いをかさねても、ひとりとして命を落とす者はいませんでした。この2千

人の若者のリーダーはだれですか。

(アルマ53:18-19)

3)この人は主から、エルサレムがはかいされるので、家族を連れてにげるようにという命令を受けました。荒野を8日間旅した後、アメリカに渡りました。この人はだれでしょう。(I ニーファイ2:1-2)

4)10さいの時、予言者アマロンから、24さいになったらシムの丘に行き、ニーファイ人の記録を取り出すようにと言われました。後にニーファイ人の記録を今のモルモン経のように短くまとめました。この人はだれですか。(モルモン1:2-4)

5)このレーマン人の予言者は^{じょうへき}城壁の上に立って、ニーファイ人に悔い改めをさげびしました。人々は石や矢でこの予言者を殺そうとしましたが、主のみたまがこの人を守りました。この人はだれでしょう?(ヒラマン13:2-4; 16:1-7)

- | | |
|----------|----------|
| 1. _____ | 4. _____ |
| 2. _____ | 5. _____ |
| 3. _____ | |



けいけん

小さなお友だちのみなさん、

天のお父様は完全なお方です。そして私たちも完全になることができます。イエス様のようになるためには、けいけんになるようどりよりくしななければなりません。静かにしているだけがけいけんではありません。けいけんとは、天のお父様に心を向けることです。

けんかをしているとき、そこにはけいけんさはありません。お父さんやお母さんの言うことをよくきく子どもは、家庭にけいけんなふんい気を作り出します。

集会のときにけいけんな気持ちをもつことは、とてもたいせつです。主の教会の会員として、そうするせきにながあるからです。プライマリーのとて、みなさんがうでを組んで静かに礼拝堂に入る姿を見て、私たちはとてもけいけんな気持ちになります。

でも、礼拝堂にいるときだけけいけんにするばいいというものではありまてせん。ホールや庭など、教会のどこにいても走りまわったり大声を出したりしないようにしましやう。

日曜学校や聖餐会せいさんかいのときに、けいけんになることによ
って、天のお父様に愛を示します。集会中は出たり入っ
たりしません。お水やお手洗いは会が始まる前にすませ
ておきましょう。人のめいわくになることはしないよう
にしましょう。けいけんな人はお話をよくききます。

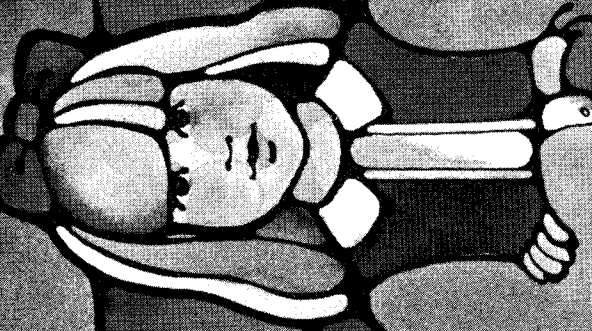
聖餐会のあいだはおしゃべりはしません。どうしても
ひつようなときは、小さな声で話します。いっしょにさ
んびかを歌います。せいさんは右手で取るようにしまし
よう。そして、せいさんがパスされている間は、救い主
のことを考えるようにします。

弟や妹がいる人はいいめないようにしましょう。弟や
妹は、お兄さんやお姉さんのおこないを見ているからで
す。お兄さんがけいけんなら、弟もそのようになるでし
よう。

けいけんな人は主の宮である神殿に入ることができま
す。そしてイエス様を近く感じるようになるでしょう。
みなさんがいつもけいけんになれるよう、また、神殿
に入る事ができるよう、心からお祈りしています。



ボーン・J・フェザーストーン
七十八第一員会会員



勇気ある人



ジョセフ・F・スミス^{だいかん}大管長は、わずか
15歳で宣教師に召されサンドイッチ
諸島に渡り4年間伝道した。

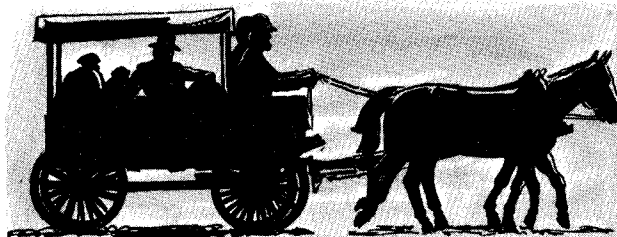


そして、3人の宣教師
といっしょにサンフラン
シスコに帰ってきた。



3人の宣教師はそこからほかの聖徒たちとソレト
レクシティーに向かった。

当時カリフォルニアの人々は、
モルモンをきらっていた。そ
れはモルモンについておお
げさで、まちがった話を
まわっていたからである。ウリア
ム・ウエルズは、自分がモル
モンであることを認めたため、
ロサンゼルスでしばしばにぞれ
やうになった。



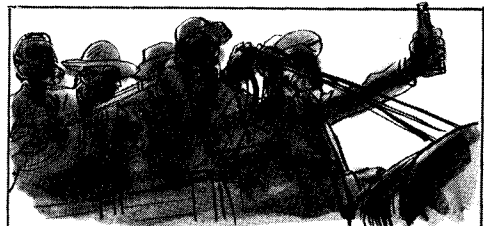
ジョセフはひとりの旅人といっしょに一晩中郵便馬車
に乗ってサンベルカレジノに向かった。



朝になったので、ある
いなか家の近くに馬車を止め、
食事の用意をした。



その間、ジョセフは馬をすく
近くの川に水を飲ませに
連れて行った。



すると何こうから酒によった男たちが
銃をふりまわしながら大きな馬車に
乗ってやってきた。サンベルカレジノにモ
ルモンを殺しに行くんだと、とくいそ
うに大声をはりあげている。

若人の集い

——信仰と希望と愛を求めて——



大会開催場所：④⑧宿泊するハイランド・ホテル ④①キャンプ・ファイヤー会場になるグランド

交通のご案内

＜車で＞

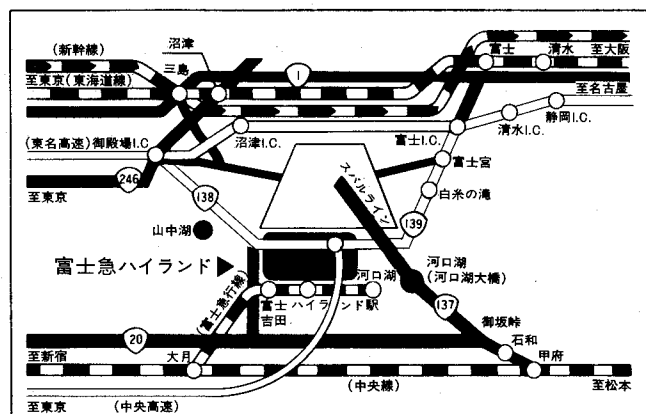
- 新宿から中央高速で70分。(終点河口湖I.C.から直接乗入れ)
- 東名高速・富士I.C.から富士宮有料道路経由で50分、御殿場I.C.から山中湖経由で40分。
- 甲府から御坂トンネル経由で40分。

＜電車で＞

- 国鉄新宿駅から河口湖ゆき「急行かわぐち号」でハイランド駅(終点河口湖駅の一つ手前)下車。

＜バスで＞

- 中央高速バスで新宿西口高速バス・ターミナルから1時間40分、浜松町バス・ターミナルから2時間10分。
- 新幹線／三島、東海道線／富士・沼津、中央線／甲府、各駅前から富士急行バス、御殿場から直通バス運転。



＜貸切バス＞

- 希望者多数の場合、都内(神殿建設予定地附近)から会場まで貸切バスの利用もできます。

＜連絡場所＞

〒194 東京都町田市原町田6-24-11 末日聖徒イエス・キリスト教会 横浜ステークス部事務所内 Tel. 0427-26-7186

夏の大会への御案内

感動の日本地域総大会から早や2年、神殿建築工事も間近いこの夏、私たちは富士山麓で、全国にいらっしゃるメルケゼデク神権M I Aの兄弟姉妹とともに、「夏の大会」を開きたいと思ひます。「人は真理を変えることはできないが、真理は人を変えることができる。」すさんでいく世の中にあつて、真理を知つた私たちが一堂に会し、雄大な大自然の中で創造主を讃美し、主から賜つた御恵みを数えあげ、お互いの愛、信仰、希望を強めていきたいと願つています。

ひとりでも多くの方が、この大会に御参加下さいますよう、御案内いたします。

末日聖徒イエス・キリスト教会
メルケゼデク神権M I A
「夏の大会」実行委員会

大会要項

名称：メルケゼデク神権M I A「夏の大会」 目的：メルケゼデク神権M I A対象者の愛、信仰、希望を強める。 期 日：1977年8月9、10、11日（2泊3日） 会 場：山梨県富士吉田剣丸尾 富士急ハイランド・ホテル他 参加資格：メルケゼデク神権M I A対象者（教会員以外の方も大歓迎）と担当指導者 参加費：1人8,500円（宿泊費、食費、大会運営費に当てられます。交通費は入っていません） 参加方法：「夏の大会」参加申込用紙に御記入の上、一通を実行委員会宛郵送して下さい。 支払方法：参加費は「M I A 参加費」と明記し、監督会／支部長会へ通常の献金方法と同じようにお納め下さい。	プログラム：第一日目 午後－チェック・イン（現地集合） 夕方－交歓会 第二日目 早朝－聖典研究、早朝マラソンほか 午前－屋外活動、ハイキング、富士登山ほか 午後－午前のづづき、趣味の交流ほか 夕方－キャンプファイヤー 第三日目 午前－講演会と証会 午後－チェック・アウト（現地解散） これらは案です。皆様からのアイディアをお待ちしています。 連絡場所：〒194 東京都町田市原町田6-24-11 末日聖徒イエス・キリスト教会 横浜ステークス部事務所内 TEL. 0427-26-7186
--	---

参加申込書は所属ワード部／支部の監督会／支部長会からお受取り下さい。

参加費8,500円は献金用紙のその他の欄に「M I A 参加費」と明記し、監督会／支部長会へ通常の献金方法と同じようにお納め下さい。

思い出多き前回大会スナップ

(1974年夏裏磐梯大会より)



▲全国から集まった兄弟姉妹たちの
交歓会 (第1日目)



▲屋外活動へ出発 (第2日目)



▲感動的な証会 (第3日目)

高原の澄みわたった空と雄大な富士。8月9、10、11日の3日間、日本全国の末日聖徒の若人が、信仰と希望と愛を求めて富士急ハイランドに集まります。混乱した世の中であってたくましく生きる若人の心と心の触れあい。それは証を求める兄弟姉妹にとって真の改宗への出発点、そして永遠の幸福への第一歩となることでしょう。

ここであるカップルの証を次頁に紹介します。1974年の裏磐梯の大会に、北海道と東京から参加したある兄弟姉妹の小さな出逢いが、素晴らしい地上の天国を造り上げました。



「雨降って愛固まる」

日本横浜ステーキ部 八王子支部

小俣 孝・志津子

3年前に裏磐梯で開かれたメルケゼデク神権M I A夏の大会は、私にとって忘れることのできない大会となりました。

教会員となって1年ほどした頃、メルケゼデク神権M I Aの大会が裏磐梯で開かれることを知りました。全国から大勢の兄弟姉妹が集まってくるということですし、前回の大会も素晴らしいものだったということなので、私も何とか出席したいと思っていました。私は商店勤めをしていましたので、休みが自由には取れません。特に7月は忙しい時期なので、休ませてもらえるかどうか不安でした。ところが、理由を知った店長が8月の夏休みを特別に大会のある日に変更してくれたのです。私は嬉しさのあまり、会社のカレンダーのその日に丸印をつけて、自分で「小俣君休み」と大きく書き入れました。

天候にこそ恵まれませんでしたでしたが、私たち若い兄弟姉妹は、雨にぬれてひときわ濃さを増した緑に包まれながら、人生についてまた信仰や希望、そして愛について語り合いました。

今、こうしてペンを走らせている私の傍らには、素晴らしいひとりの姉妹と赤ちゃんがいます。あの時、雨にけむる五色沼のほつりを初めて会ったふたりが相々傘で散歩しました。室蘭から参加したひとりの姉妹と、それに私です。あれから3年、今ではひとりの子供に恵まれて本当に幸せな生活を送っています。

「雨降って愛固まる」これは証会の会場に掲げられていた言葉です。私は神様の導きに心から感謝すると共に、私たちふたりを結びつけてくれたこの言葉を、これからも深くかみしめながら生活していきたいと思っております。イエス・キリストのみ名によって証します。アーメン。

私は、裏磐梯で開かれたあのメルケゼデク神権M I Aの大会を、決して忘れることができません。と言いましても、大会に集うことが決まるまではいろいろなことがありました。

まず第一に、私自身の心の中に、大会に参加したいという気持ちがあまりありませんでした。知らない人たちの間で3日間も起居を共にすることなど、その頃の私には考えもつかないことだったからです。それに父が許してくれるかどうかわかりませんでした。また会社の給料日と大会の日程が重なっていました。経理担当の私がいないと、社員の人たちの給料が出せないのです。このようなわけですから、申し込みはしたものの、大会が近づくにつれて次第に憂うつになってきました。

ちょうどその頃、前回の大会に参加した兄弟姉妹たちの証集が私の手元に届きました。何気なくその証集を手にとって読んでいた私は、胸が熱くなってきました。こんな強い証を持った兄弟姉妹と会える。こんな強い信仰を持った人たちと友達になれるのです。私は証集を握りしめながら、どんなことがあっても参加しようと決心しました。

そうなるというもので、会社では給料日を繰り上げてくれましたし、父も何も言わずに許してくれました。

私は心はずませて大会に参加しました。そして何人かの人たちとお友達になり、強い証を得て室蘭に帰りました。大会から3年たった今、私のそばには大会で知り合った兄弟と、4月に生まれた息子の強がいます。もしも私があその時に心を開いて大会に参加しようとしなかったら、今の幸せはなかったことでしょう。

今年も8月初旬にメルケゼデク神権M I Aの大会が開かれるということを聞き、3年前のことを懐かしく思い出しております。この大会を通じて参加される兄弟姉妹の信仰と証が強められ、さらに愛が育まれて、私たちと同じ喜びを少しでも多くの方々味わわれるようお祈り致します。すべてイエス・キリストのみ名により、アーメン。

◇ ◇
(左段は孝兄弟、右段は志津子姉妹の証)



そのうちのひとりが郵便馬車に
近づいてきた。



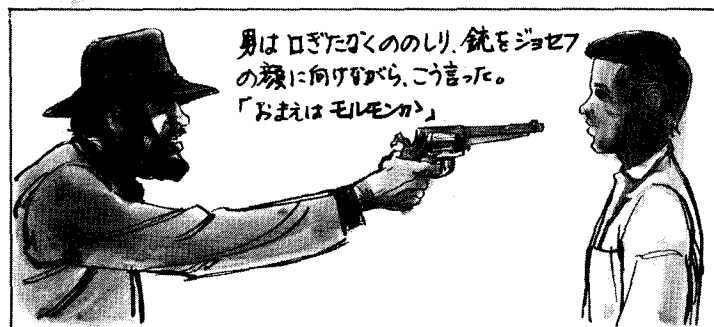
はいっ
郵便配達人と
旅人はにげて
しまった。

ちょうどそのとき ジョセフがもどってきた。



その男はモルモンのことを
ののしりながら銃をふり
まわしていた。

ジョセフはびくとした。しかし
自分は何も悪いことはしてい
ないとも言わぬようにチャンプ
している場所にもすぐ歩いて
行った。



男は口ごたなくののしり、銃をジョセフ
の顔に向けながら、こう言った。
「おまえはモルモンか」



ジョセフは相手の顔をじっと見つめて
答えた。「そうです。まちがいに
モルモン教徒です。」

この大膽で正直な答えに
おどろいた男は、銃をおさ
めた。



そして男はおそろおそろ
手を差し出して言った。
「あくしゃしょう。自分が
正しいと思っていること
を勇気をもって行なう男に
会えてうれしいよ。」

「安息日を覚えて、これを聖とせよ。六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。七日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざをもしてはなら

ない。……主は六日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造って、七日目に休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた。」（出エジプト20





にちよう日のはこ

バージニア・H・ピアス
キャスリーン・H・バーンス



： 8－11)

安息日はとくべつな日です。けいけんな
気持ちでものを考え、おこなう日です。

きれいな日

くつはピカピカです。

ようふくはよごれていません。

かみはきれいにとかしました。

うれしい日

かぞくといっしょにすごします。

教会で友だちとあいます。

にこにこしています。

けいけんな日

日曜学校とせいさん会に行きます。イエ
スさまと天のお父さまについてまなびます。

おうちでもけいけんにします。主の日
は毎日おこなっているしごとはしません。
何をしたらよいのでしょうか？考えてみてく
ださい。

きんじょの人をほうもんする。

せいてんをよむ。

さんぽする。

かぞくとおはなしする。

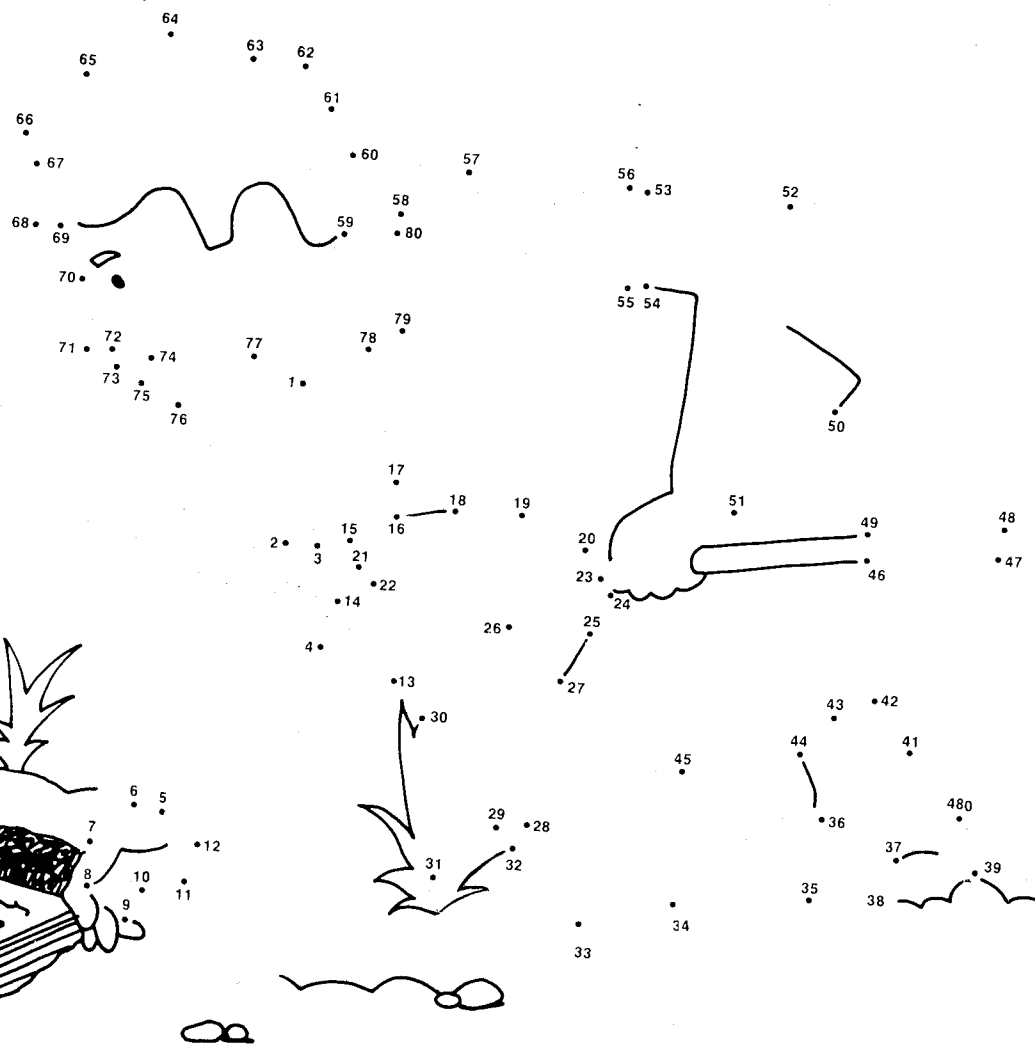
人にしんせつにする。

「せいとのみち」をよむ。

これをひとつずつカードにかきます。そ
れを小さいはこで作った「にちようびのは
こ」の中に入れておきます。まい週そのは
こをひらいてあんそく日をけいけんにしご
すようにしましょう。



おもちゃばこ





「鉄柱を 打て！」

B・ロイド・ボールマン

「このへんの鉄柱からセメントを全部打ち落としてくれ」親方はそう言って大ハンマーを私に手渡し、後ろに立って始めるのを見ていた。私は見てくれとばかりに両足を広げ、ハンマーを高々と振り上げて、掘り起こされたガードレールに酒だるのようにこびりついているセメントめがけて、はしと打ち下ろした。

6回……7回……8回と同じ箇所にかけてハンマーを振るったが、感じる

13本の足がくっついて、まるで歯が欠けた櫛 のような長いガードレールを、私は見つめな おした。

のはハンマーの柄に返ってくるズシンズシンという手ごたえだけだった。打ち下ろしても打ち下ろしても、固いセメントはかけらも砕けはしなかった。ハンマーを地面に下ろしてひと呼吸し、右肩をさすってからまたハンマーを振り上げ、何べんもやってみたが、いっように壊れない。

親方がいすわって見ているのでばつが悪かったが、どうしても割れない。親方は「何かもっといいやつ、捜してくるから」と言って道具置場に出かけに行った。

その朝、足首までの仕事靴をはき、ジーパンの後ろのポケットに皮手袋をぶら下げて仕事場に着いた時は、前の2日と同じようにこの日限りでクビになりはしないかと心配だった。お払い箱はいやだった。あと3ヵ月すれば伝道本部に行かなければならない。せめて初めの数ヵ月分でも自分の伝道資金を稼ぎたかった。

父は、私を伝道に出すためには家族でどんな犠牲も惜しまないと言ってくれた。父はその犠牲がどんなものか、よくわかっていた。兄のロンが伝道に出た時には、パンに塗ったマーガリンをよく伸ばしてから、そのほとんどをこすり取ってマーガリンケースに戻したのを覚えている。私がアルバイトでもらったお金の何ドルかをロンに送ってほしいと差し出した時、父は心から感謝してくれた。

私は、本当の犠牲とは家族みんなが喜んで捧げるものだというを知っていた。それに、自分ができるだけのことをしなければいけないこともわかっていた。

私はハンマーの柄を、今度はもっと力が入るように少し下の方をつかんでしっかり握りしめた。それから何回もセメントに叩きつけたが、だんだん頭に血が上ってくるのがわかった。これでもか、これでもか。なんで割れないんだ！

私は道具置場の方をにらみながら「親方が戻るまでには、何とかしなければ」とつぶやいた。

月曜の朝、伝道のために大学を2、3ヵ月休んで働きたいと親方に話した時は、殊勝なやつだと思ってもらえると思ったが、「時間の浪費だ、なんでまあ」と言われただけだった。それからというもの、親方は自分の仕事もそっちのけで、教会の悪口を言ったり、思うに私へのいやがらせのつもりで、露骨なことを言ったりした。しかし彼は親方で、私のクビになる、ならないも彼次第だった。

初めてこの仕事にありつき、パート・ゴッドフリーと組になって火事で焼けた木造の小屋をブロック壁に直した時は、今よりずっと気持ちよく働けた。ゴッドフリーさんは一見無骨だけれど心が温かで、3回経験した伝道の2回は建築宣教師ということだった。そんな彼に、私は好感を抱かずにはいられなかった。

会社の契約は10日間で、ほとんどはその壁積みだったが、パートと私は、頑張って1週間で終わらせてしまった。私は経験もないし、あまり上手でなかったが、彼は気にしないようであった。彼は私が一生懸命だということを知っていたし、どうして頑張っているのか、

その理由もわかっていた。そして彼は、もっぱら主に仕えた時の話を私にしてくれた。

パートは本当の親方が休暇中であることを私に話さなかったので、週明けの月曜日に仕事に行ってみて驚いた。しかしとにかくその時までには、作戦はうまく行っていたのだ。賃金はそれまでで最高の仕事だったのだが、一生懸命働いてお金以上の仕事をしていれば認めてもらえて、親方は私をクビになどできないだろうと思ったのである。

13本の足がくっついて、まるで歯が欠けた櫛のような長いガードレールを、私は見つめなおした。昔は駐車場の車が周囲の建物にぶつからないように守っていたガードレール。地面に一直線に3メートル間隔で13の穴を掘って鉄柱が埋め込まれ、そこにセメントが流し込まれる。こうして固定された13の鉄柱がガードレールでひとつにつながっていた。それが、2台のフォークリフトでえいっとばかり引き抜かれ、足に酒だるのようにセメントの塊をくっつけたまま車道に置かれているのである。

アスファルトの舗道の上の荒い砂利をひきずって歩いてくる靴音が、道具置場の方から聞こえてきたので、私はハンマーを振りかぶってめった打ちした。額に汗がにじんでいるのを感じた。「ほれ、これ使ってみな」親方はそう言ってもっと重いハンマーをくれた。思ったよりもずっと重い。

私は笑顔を作って小さい方のハンマーと交換したが、心からの笑顔でないことは彼も感じただろうと思う。親方は2、3分私を見ていたが、それ以上



何も言わずに組立て設備の改造をしている仲間の方を監督に行った。

「何だい。違うのは、重くて持ち上げるのが大変なことだけだ。」ハンマーの頭をコチコチのセメントにぶつけながら、私はぶつぶつ文句を言った。やっと、小さなかけらがひとつ飛び散った。それから何回か叩いているうちに肩が痛みだしたが、それでもセメントはそっくりそのままだった。

この調子では仕事に3日はかかると思った。お昼までに何とかならないと、きつとクビになってまたあの職安に逆戻り。列を作って職捜しだと思った。首をつなぐのに、はらはらし通しのこの3日間だったのだ。

おまけに時は1954年、ストライキであぶれた大勢の家族持ちが、アルバイトや職を求めている。数少ない仕事に20歳の若造がどうして太刀打ちできるものか。

それから数回懸命に叩いてみたが無駄骨だった。もう限界だ。自分なんかより力も強く頭も良いやつでなければどうにもならない仕事だ。これが引き際だという思いがした。

重いハンマーを地面に下ろして、カッカとするやり場の無い気持を静めようと努めていると、主に話してみたい、そうしなければ、と感じた。私はひざまずきもせず、目もつぶらず、声を出して主に祈り、自分の仕事を説明した。ざっくばらんではあったが、真心をこめて、自分は黄色のスポーツカーなどを買うためにお金が欲しいと願ったことはないと言った。伝道に召されてそれがみ旨だということがわかり、現に

この仕事も祈りの答えとして受けたのだから続けなければならない。ハンマー片手の天使たちを天から送ってほしいとは思わないが、主なら私を助けて下さるとよくわかっていると祈った。

祈りがあんなにもすぐにはっきりと答えられたのは、後にも先にもあの時だけだった。急に頭がすっきりと冴えて元気が出、胸がドキドキし始めた。後で考えると、何でもないことだったと思う。頭の良い人や経験のある人ならもっと早くわかっていたのだろうが、私にとっては祈りの答えとして初めてそれがわかったのだ。

「セメントを打つかわりに鉄柱を打て。」そう、しきりに促す声がした。

なぜかはっきりとわからないまでも、私はハンマーを振り上げて、セメントのすぐ横の鉄柱に5、6回叩きつけた。セメントの塊が大きなかけらとなって落ちたとき、鉄柱をガンガン叩いたのが強い振動になって全体に伝わったことが初めてわかった。

ハンマーの重みもすぐに忘れた。新しい力が湧いてきて、私は鉄柱を2回、3回と続けざまに叩き、それから次の鉄柱に移った。我ながら驚くように鉄柱がピンピンうなり、セメントが崩れて行った。

それから2時間も経たないうちに13本の鉄柱全部からセメントがきれいに取れ、割れたセメントが山と積まれた。私は大ハンマーを肩にかつぎ、心の中で感謝の祈りをつぶやきながら、親方を捜しに行った。

「ガードレールを車道からどかすのに、だれか手を貸して欲しいんですが。」

私は躍る心を努めて抑えながら言った。親方は私がさじを投げたと思って、ついて来いというしぐさをして先に立って駐車場の方に歩き出した。

建物の角を曲がると、親方はガードレールとセメントの山を見つけて、ぎくっと立ち止まった。そして目を大きく見開き、ぱちぱちさせた。あごが心もちかくんと開いた。親方はその場に立ち尽くしたまま、ガードレールを見ては、次にセメントを見た。ややあってから、また私について来いという身振りをして言った。「こっちへ来い。別の仕事だ。」

そのことについては何も言われなかったが、翌朝仕事場につくと親方がこう言った。「ロイド、好きなだけ仕事に来ていいぞ。」

私は、伝道本部に行くまで3ヵ月近くそこで働いた。親方は、それから後も10日間また仕事をくれて、その後私は同僚たちと一緒に伝道に出発した。あの思い出深い朝以来、親方は私の前では教会のことや伝道に行くことをけなすような言葉は一度も口にしなかった。

主はあの日からこれまでに何度も、私が別の問題に遭遇した時、「セメントではなく鉄柱を打つ」ように思い出させて下さった。1954年11月の下旬に伝道に出発した時、私は自分が主によって召されていることをはっきりと知った。主が自分の祈りを聞いておられること、そして主は私達に、戒めを与える時には必ずその方法も備えて下さることを、自分自身で知ったのである。



「永世にわたる 記録」

スペンサー・W・キンボール大管長

モーセが、旧約聖書の初めの五書に世界の歴史を記さなかったとしたら、私たちはどうなっていたらうか。十分な経験と意志を備え、しかも資料や記録に恵まれていたモーセは、聖書の初めの五書を著わし、私たちを永遠に祝福するという功績を果たしたのである。

アブラハムが人生の記録をつづり、世界史のあの大切な部分を書き残し、自分が受けた啓示や考え、気持、豊かな経験を記してくれたことは、私たちにとってどんなにありがたいことだろうか。

主イエス・キリスト御自身も、ニーファイ人とレーマン人に対して記録をつけることの大切さを強調しておられる。

「……『われは汝らがいまだ持たざる別の聖文を書くことを汝らに望む』と仰せになって、ニーファイに向い『汝らの造りし記録をもち来りて見せよ』と命じたもうた。

そこでニーファイがいろいろの記録をもってきてイエスの御前に置くと、イエスはこれを見てその弟子たちにたずねたもうた。

『われまことに汝らに告ぐ、われはレーマン人なるわが僕サムエルに命令を与えたり。その命令は、御父われによりてその御名の栄光を示したもう日に多くの聖徒死者の中よりよみがえりて多くの人々に現われ、これに導きと恵みを与ふと言ふことを、この民に予言してその証をなせと言ふことなり。されど如何に、その予言は事実となりしにあらずや』と。

そこで弟子たちは答えて『主よ、サムエルは今主が仰せになりたる通り予言して、その予言はすでにみな事実になれり』と申し上げた。

するとイエスはまた問うて『さらば、多くの聖徒よみがえりて多くの人々に現われ、これに導きと恵みを与えしことを書かざるは何故か』と仰せになった。

そこでニーファイはまだこれを書き記していないことを

思い起した。そしてイエスがこのことも書きしるしておけると言いたもうたのでイエスの言葉のように記録をした。(Ⅲニーファイ23：6-13)

穏やかで優しい言葉だが、これは叱責である。私たちは新しい出来事を常に記録するよう命じられているが、私はこの叱責が私に向けられたものでないことに安堵の気持を覚えている。

リーハイの家族がアメリカ大陸に着いてからすぐに、息子のニーファイがこのように言っている。

「……まことに神の恵みと神の奥義とを深く知っているから、私は今一生の中にしたことを記録する。

さて私は今書く記録が真実であることを知っていて、これを自分の手で書き、自分の知っていることに従って書くのである。(Ⅰニーファイ1：1, 3)

この優れた記録には、民の動向だけでなく、ニーファイ個人の生活上の出来事も含まれている。

ここで留意しなければならないのは、近代の予言者ジョセフ・スミスが福音回復の次第に加えて、自分の個人的な経験も詳細に書き残したその大変な努力を、私たちは忘れてはならないし、おろそかにしてもいけないということである。ジョセフ自身に関する詳細な記録がなかったとしたら、私たちの間にどんなに大きな混乱が起きていたことであらう。

私たちが自分の祖父母の日記を見つけて、その苦勞や喜びから彼らをしのび、先祖の経験や信仰や勇気から多くの教訓を得ることができるということは実に大きな祝福である。

そこで、教会の若人にお勧めする。きょうから、自分の生活に起きる重要な出来事を、万一両親が先祖のそうした出来事について記録していなければそれも含めて、すべて記録していただきたい。個人の日記には、どのように問題に立ち向かったかを記録するとよい。子孫にとってこのよ



うな経験は無意味だなどと考えないでいただきたい。働いた経験、人々とのつきあい、これをして良かった、あれをして悪かったというのも良いと思う。ロイヤル・バンク・オブ・カナダ月報に、このような記事があった。「ある有名な蔵書家は、ほう大な数の蔵書を『伝記』と『その他』のふたつに分類した」

あらゆる人にはそれぞれの持ち味があるはずである。困難を克服し、闘いながら成功を勝ち取った人の伝記を読んで、何も学び取ることでできない人があるだろうか。こうした記録は人間の進歩の道標である。

偉人の伝記を読むと、彼らが一夜にして有名になったり、生まれつきの玄人や優秀な職人であったわけではないことがわかる。彼らが偉人となるまでの経過をつづった話は、私たちすべてにとって有益なものとなることであろう。

あなた方の日記もすべて、昔も今も変わらない問題と、それにどう対処したかを子孫に伝えるものとなるのである。

日記には、格好よく飾りたてた架空の完璧な姿ではなくありのままの自分を書きなさい。良い所を極彩色にして、悪い所を削除したいと思う気持ちはだれにでもある。また逆に、悪い所を強調してしまう危険性もある。私個人は、自分のことでも他人のことでも、生活の醜い面をせんさくする人をあまり尊敬できない。あくまでも、真理を語るべきであって、否定的なことを強調すべきではない。霊的な経験に満ちた長い人生も、ひとつの醜悪な話で台無しになってしまうことがある。人生の大半を分別を持って過ごしてきた人のひとつのいまわしい現実になぜ執着するのであろうか。

良い伝記作家は、感情に頼らず、良識に頼る。的はずれなことははき捨てて、もっともなこと、斬新なこと、興味あることを捜すものである。「プルターク英雄伝」を読むと得るところがある。プルタークはこの中で46人の著名

なギリシャ人とローマ人をそれぞれ対比させながら伝記を書いているが、細部にはこだわらず、際立った部分だけを取り上げて書いている点は、注目に値する。

あなたの日記はあなたの伝記である。従って丁寧に記録しなさい。あなたという人間はひとりしかいない。従ってほかのいかなる人の人生の記録より、もっと貴重で素晴らしいあなたなりの経験や出来事が書けるはずである。あちらこちらに才気にたけた言葉や信仰の話があるだろう。あなたは正直に、人の目から見た自分ではない本当の自分を記録しなさい。まだ記憶が新鮮で詳しいことを覚えているうちに日記に書きとめなさい。

日記を書くということは、すぐれた特質を具えた個人個人が自分の文学を作り上げることである。従ってだれもがつつましい生活の中でも立派な人間になることができるのである。

苦難を乗り越えたこと、挫折から立ち直ったこと、八方ふさがりの中でも進歩を続けたこと、目的を完遂した喜びこれらを記した一生の記録を残すこと以上に、子供や孫のためにしてあげられることがあるだろうか。

書くことの中には日常のへんてつもない出来事や有様もあろうが、将来子供たちが引用して語るような味わいある文章もあって然るべきである。

教会の若人に申し上げる。日記帳を用意して生涯の記録を書き留めていただきたい。天使たちはあなたの永遠にわたってその記録から引用することもあり得るのである。きょうから始めて、生活のあれこれや心に深く考えていること、達成したことや成功、失敗、交際および印象に残ったこと、そして自分の証を、そこにつづりなさい。救い主が、大切な出来事を記録しなかった人をとがめられたことを、忘れてはならない。

主は言われた。「われまことに、まことに汝らに告ぐ、
以上はわが福音なり。わが教会に於てなすべきことは、
汝らすでによく知れり。すなわち、汝らが見たるわが行い
を汝らもせよ。これらのことは汝らも行うべきことなれば
なり。」(Ⅲニーフアイ27:21)

キリストは私たちのために模範を示された。私たちは、
一生懸命にこの模範に従おうとしている。私たちはキリス
トに比べてまことに弱者ではあるが、その模範を見習う
べきである。主は、「道であり、真理であり、命」(ヨハ
ネ14:6)であるからである。

イエス・キリストが人々に教を説いておられた時に示
された模範に従うならば、教師たちの得るところまことに
大である。私たちが説いているのは、主の教である。そ
れ故私たちは、自分自身に栄光を帰すべきではないし、自
分への追従者を求めるようなこともすべきではない。私た
ちは、キリストに従う人々を養成する仕事に携わっている
のである。バプテスマのヨハネは、この原則をはっきりと
教えた。彼は自分と救い主との関係を次のように言ってい
る。

「彼は必ず栄え、わたしは衰える。」(ヨハネ3:30)

教師は、基本的な教を述べる間は、生徒を自分のとこ
ろに引きつけておいてもよい。しかし、その教の本質や
教師の模範は、生徒の心をキリストに向けさせるものでな
くなくてはならない。バプテスマのヨハネが人々に向かって悔
い改めを叫んだのは、救い主のみ業の道を備えるためであ
った。この悔い改めの呼びかけには、すべての人が救い主
を仰ぎ見て、真理と救いの道に導いていただくのであると
いう、独特の教が含まれている。同様に教師も、生徒が
主のもとにきて、主と個々に有意義な関係を打ち立てるた
めの備えができるようにする責任が与えられているのであ
る。

救い主に見る教師の模範

セオ・E・マキーン

「自分たちの光を輝かせよ」

私たちは道を照らす者とならなければならない。

イエスは言われた。「われは汝らをこの民の光となす。

故に、この民が汝らの善き行いを見て天にまします汝ら
の父を崇むるに至るよう、汝らはこの民の前に自分たちの
光を輝かせよ。」(Ⅲニーフアイ12:14, 16)

私たちの仕事の主のみ業となる時、そしてその仕事の主
の光で照らし出される時、生徒の心は主に向けられ、天
父に向けられるようになる。

「されば、汝らの光が輝きて世の中を照らすために、汝
らの光を高くかかげよ。汝らが高くかかぐる光とは、すな
わちわれなり。とりもおさず汝らが見るわが行いなり。」

(Ⅲニーフアイ18:24)

効果的に生徒を教えるためには、彼らを導く光をまず私
たちの中に輝かさなければならない。私たちが従順の模範
とならなければならないのである。これこそ、教える職に
召されている人々が行なう準備の中で、必要欠くべからざる
要素である。(この特集の最初の記事「教授と学習の関
係」を表わした図〔「聖徒の道」1977年4月号 p.240)を参
照)

キリストの模範は、私たちが従って然るべき模範である。
主は、御自分から進んでなさらなかったようなことは、決
して私たちに求められない。

主は次のようにはっきりと教えられた。

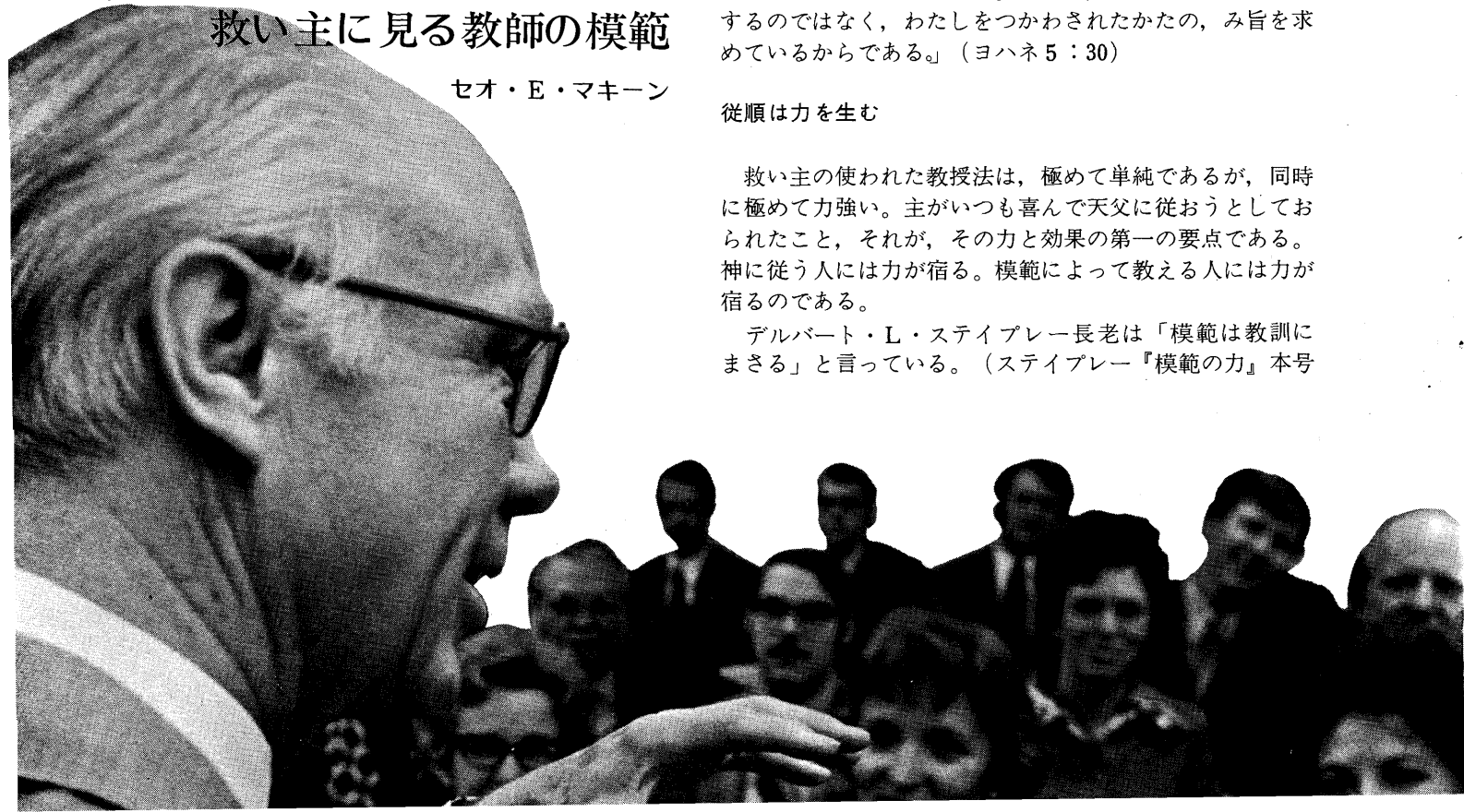
「子は父のなさることを見てする以外に、自分からは何
事もすることができない。父のなさることであればすべて、
子もそのとおりにするのである。」(ヨハネ5:19)

更に言われた。「わたしは、自分からは何事もするこ
とができない。ただ聞くままにさばくのである。そして、わ
たしのこのさばきは正しい。それは、わたし自身の考えで
するのではなく、わたしをつかわされたかたの、み旨を求
めているからである。」(ヨハネ5:30)

従順は力を生む

救い主の使われた教授法は、極めて単純であるが、同時
に極めて力強い。主がいつも喜んで天父に従おうとしてお
られたこと、それが、その力と効果の第一の要点である。
神に従う人には力が宿る。模範によって教える人には力が
宿るのである。

デルバート・L・ステイプレー長老は「模範は教訓に
まさる」と言っている。(ステイプレー『模範の力』本号



掲載の全文を参照)

自分の教える福音の偉大な真理に自ら従順な教師は、自分の語る言葉に、みたまによって力が加えられる。

「まことにかれらの言葉の力によって、この多くの人は神の聖壇の前にきて神に祈り、その御前で自分の罪を告白した。」(アルマ17:4)

だれでも望むならば、福音を言葉で伝えることはできる。しかし、人を変えるほどの力ある言葉は、従順な教師のみが語ることのできるものなのである。

パウロはテモテを次のように戒めた。「言葉にも、行状にも、愛にも、信仰にも、純潔にも、信者の模範にならなさい。」(Iテモテ4:12)

これが主の方法である。私たちは教師として、模範の効果に十分な信頼をおくべきである。模範が霊的な力を伴った時、それは、私たちの主要な教授法のひとつとなるはずである。

教会で教えるに携わる長老に対し、ペテロは次のような勧告を与えている。

「あなたがたにゆだねられている神の羊の群れを牧しなさい。しいられてするのではなく、神に従って自ら進んでなし、恥ずべき利得のためではなく、本心から、それをしなさい。

また、ゆだねられた者たちの上に権力をふるうことをしないで、むしろ、群れの模範となるべきである。

そうすれば、大牧者が現れる時には、しばむことのない栄光の冠を受けるであろう。」(Iペテロ5:2-4)

自問自答

教師が自分の模範の質を吟味するための理想的な方法は、教師自身、自問自答を試みることである。

息子アルマは、判事の地位を辞して全精力を神のみ言葉を説くことにささげた人物であるが、彼は、教会員が霊的な準備の面で高い水準を保つことができるよう、興味深い方法を用いてそれを行なった。アルマ書の第5章には、教会員を自問自答という方法によって導く目的で、40あまりの質問が用意されている。福音の教師たる者はこの章全部を残らず、注意深く読んでいただきたい。

主は光であって、私たちは皆その光を、他の人々に見えるように高く掲げるべきであると救い主は教えられた。それと同じようにアルマはこう言っている。

「わが教会の兄弟諸君よ。私はあなたたちに聞くが、あなたたちは今日霊によって生れ神の子になっているか。あなたたちは神の御姿を自分の身に受けているか。あなたたちは今言ったような大きな改心をすでに感じているか。

あるいはその日に、あなたたちはすでに神の御姿を自分の身に刻んで清い心と清い手をもって神を仰ぎ見ることができと思うか。」(アルマ5:14, 19)

そして更に、私たちが日々、これらすべての質問に「はい」と答えられる生活をおくることができるよう、アルマは重ねて尋ねている。

「私の兄弟諸君よ、あなたたちにもしも心を改めたことと、贖いを与える愛を讃美する歌を唱えたいと思ったことがあるならば、今もそう思えるか私はたずねたい。

あなたたちはいつも神の御前に罪を犯さずに居ったか。あなたたちがもしも今にも死ぬとするならば、心の中に『私は充分へりくだっている』と言い、また『私の衣は、その民の罪を贖うために降臨したもうキリストの血で洗われて白くなっている』と言えるであろうか。

ごらん、あなたたちは高慢な心をすっかり取り去ったか。あなたたちの中にはまだねたみ心をすっかり取り去らない者がいるか。……

またあなたたちの中に兄弟を侮りこれを苦しめる者がいるか。

このような人は禍である。なぜならばこのような人も用意がしてない者で……あるからである。」(アルマ5:26-31)

そして最後に、私たちが、自分自身に対する責任ばかりでなく、他人に対する責任をも理解することができるよう、アルマは次のように言葉を結んでいる。

「多くの羊をもつとき、おおかみが入ってきて羊を食い殺さないようにこれを保護しない羊飼いがあなたたちの中にあるか。ごらん、もしもおおかみがどうかして羊の群に入ってくることがあれば、羊飼いは直ちにこれを追い払うではないか。本当にその通り、最後にもしできることならおおかみを殺すにちがいない。

さて私はあなたたちに告げる。良い羊飼いは今やあなたたちを呼んで招いて居りたもう。あなたたちがもしその声に聞き従うならば、そのお方はあなたたちをその羊の群に加えたまい、あなたたちはその羊になるのである。そしてそのお方は、あなたたちに命じて汝らの亡びぬよう貪欲なおかみを汝らの中に侵入させるなど言いたもう。

今私アルマもまた命令を私に下したもうたお方の言葉を借りて、私がすでにあなたたちに告げた言葉を守って行えとあなたたちに言う。」(アルマ5:59-61)

アルマの教えは、彼の父親が明言した模範のあり方にかなっている。彼の父はこう言っている。

「誰であっても神の心にかない神の道を歩み神の命令を守る者でなければ、その人を信じて教師または教会の指導者にしないようにしてほしい。」(モーサヤ23:14)

備えをなせ

私たちは、教える際にどれほどの準備ができているだろうか。福音の知識を日々深めているだろうか。聖典を研究し、深く考え、祈り、耳を傾け、そしてみたまの力によって学んでいるだろうか。私たちは自分が学んだ通りの生活をしているだろうか。他の人々が私たちの光を見たら、キリストの光も見えるだろうか。私たちの言葉や行ないで、他の人々が天父をあがめ、天父に心を向けるようになるだろうか。

私たちが個人として、まだ十分に準備のできていない点があれば、改めるべきことはためらわずにすぐにでも改めようではないか。そして、最も基本的な次の問いと答えを決して忘れないようにしようではないか。

「故に、汝らはいかなる人物にてあるべきか。まことに汝らはわれと同じ人物ならざるべからず。」(IIIニーファイ27:27)

模範の力



十二使徒評議員会会員
デルバート・L・ステイブラー

愛する兄弟姉妹及び友人の皆様、この世に真理と正義を広めるためには、キリストの模範にならって、福音の原則と標準と理想にかなった生活を送ることにもっと注意を払う必要があると、私は確信している。

世の中はこれまで以上に、良識と霊性を備えた男女、すなわち確固として神の戒めを守り、真理と正義の模範に生きる人々を必要としている。

模範の力は、その模範を示す人々が福音に従った生活をしてこそ、その強さが発揮される。そのような人の顔からは、イエス・キリストの栄えある福音の光が灯台の光のように放射して、人々を徳高い道へと導くのである。

ある賢者は、新しい教師の指針として、偉大な教師と言われる人々に共通して見いだされる大切な点を3つ挙げるように求められた時、次のように答えている。「第一に、模範によって教えること。第二に、模範によって教えること。第三に、模範によって教えること。」

救い主イエス・キリストは、比類なき偉大な教師である。イエスの教えは、いつの世にもすたれることはない。なぜなら、イエスは自らの生活の模範によって、教えを強調されたからである。

宗教的に見た場合、模範とは、他の人々が見習ってためになるような行ないや態度を示すことである。

「あなたがいかなる人物であるか、私の耳に雷のように鳴り響き、あなたの言っている言葉が聞こえない」と、エマソンは言っている。

「見よ、われは光なり。われは汝らのためにすでに模範を示しぬ。」(Ⅲニーファイ18:16)

このチャレンジに満ちた贖い主のみ言葉を、私たちは何の抵抗もなく確信を持って受け入れることができる。

使徒ペテロは、主が模範を示して下さったことを強調して次のように述べている。

「あなたがたは、実にそうするようにと召されたのである。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、御足の跡を踏み従うようにと、模範を残されたのである。

キリストは罪を犯さず、その口には偽りがなかった。

ののしられても、ののしりかえさず、苦しめられても、おびやかすことをせず、正しいさばきをするかたに、いっさいをゆだねておられた。」(Ⅰペテロ2:21-23)

次の救い主のみ言葉は、今日の教会員に当てはめることができる。「そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」

(マタイ5:16)

この聖句は良い模範を示すことの大切さと価値を強調している。

ニーファイの言葉にあるように、キリストは、「天の御父の前にへりくだることと、天の御父に従ってその命令を守ると証明することを世の人に示したのである。……

また……人のふむべき道が真直ぐであることと、人のくぐるべき門が狭いこととを世の人に教えたもうのであって、子羊は自分から世の人の前にバプテスマを受ける模範を示したもうた。

子羊は、われに従えと世の人に仰せになった。それであるから私の愛する兄弟たちよ、もしも喜んで天の御父の命令に従わないならば、私たちはイエスに従うことができるか。」

(Ⅱニーファイ31:7, 9-10)

またキリストは全人類に次のようなチャレンジを与えておられる。「故にわれにならいて、汝らの見たるわれの行いを汝らもせよ。」(Ⅱニーファイ31:12)

この警告は、神の声によってニーファイに確認された。「わが愛子の言うことは真実にして確なり。終りまで忍ぶ者は救われん。」(Ⅱニーファイ31:15) これに対してニーファイは言っている。「さて私の愛する兄弟たちよ、私はこれによって、人がもしも生ける神の御子が示したもうた模範に従って終りまで忍ばないならば決して救われないことを知っている。」(Ⅱニーファイ31:16)

これらの教えは、正義にかなった生活を送るようにとすべての人々に勧告を与えるものである。神のみ前に立ち返らせる唯一の道はこれである。

ニーファイ人の予言者アルマの息子であるコリアントンは、伝道中愚かにも浮かれ女イザベルの後を追って、父の深い悲しみを誘った。息子の行ないに落胆したアルマは、息子を叱責して、次のように言っている。

「かれらはお前の悪い行いを見て私の言うことを信じな

かった。」(アルマ39:11)

確かに、模範は教訓にまさる。

マッケイ大管長はこうに述べている。「口では正直を説きながら、子供の前で不正直な行ないをすることは、ふるいに水を入れて湯を沸かすのと同じ位無益なことである。」(*Pathways to Happiness* 「幸福への道」 p.307)

両親が自ら清い生活を送り、神の律法と戒めに従うことは、いかに重要なことであろうか。そのようにする両親は、実生活における模範によって子供たちを教え導くことができる。そうしなければ、生活上の個人的で複雑な問題や疑問について子供たちと話し合う機会を自ら閉ざすことになるのである。

ブリガム・ヤング大管長は、模範によって子供たちを教えることについて、両親に次のような勧告を与えている。「子供がまねるにふさわしく、天父のところに適った模範を両親が絶えず示すならば、子供はそれに順応し、考えもその模範に従い、ついには、悪よりも善を望むようになるであろう。」(*Journal of Discourses* 「説教集」第14巻, p.195)

「私たちは、子供たちに望まないことを決して自ら行なってはならない。子供たちに見習ってほしいと思うことを模範として示すべきである。子供に従順、良い行ない、良い言葉、にこやかな顔、やさしい声、輝きに満ちた目を期待しながら、自らは年中小言を言って苦々しい顔つきをしている両親が何と多いことであろう。この矛盾、この理不尽には返す言葉がない。」(同上 p.192)

「両親はむちではなく信仰によって子供をおさめ、良い模範によって子供をあらゆる真理と聖さへと穏やかに導かなければならない。」(*Journal of Discourses* 「説教集」第12巻, p.174)

「私たちがこの教会の真理に従って生活するならば、子供たちも真理を愛する者となるであろう。両親は子供たちに、『僕はお父さんが他の人をだましたり、欺いたりするのを見たことがない。……お父さんは、正直でうそをつかず、清く、親切で、勤勉で、思慮深く、良いことをする人になりなさい、と言っています』と言われるような道を歩むべきである。このような教えは、いつまでも子供の心に残るであろう。」(*Journal of Discourses* 「説教集」第14巻, p.195)

聖典にも模範について述べたところが、使徒パウロはコリントの聖徒たちに宛てて次のような警告を与えている。

「これらの出来事は、わたしたちに対する警告であって、彼らが悪をむさばったように、わたしたちも悪をむさばることのないためなのである。

また、ある者たちがしたように、わたしたちは品行をしてはならない。……

また、ある者たちがしたように、わたしたちは主を試みはならない。主を試みた者は、へびに殺された。

また、ある者たちがつぶやいたように、つぶやいてはならない。つぶやいた者は、『死の使』に滅ばされた。

これらの事が彼らに起ったのは、他に対する警告としてであって、それが書かれたのは、……わたしたちに対する訓戒のためである。

だから、立っていると思う者は、倒れないように気をつ

けるがよい。」(I コリント10:6, 8-12)

神の王国で教え導く者は、キリストが偉大な模範であることを忘れてはならない。従って、主のぶどう園で働くよう召されたあらゆる指導者と教師は、人々が福音の原則と標準と理想に従って生活し、福音に属ける特権と祝福にあずかることを期待する。しかしそれには大きな責任が伴うのである。にもかかわらず、すべての役員教師が必ずしも自分の生活で、それらのことを実行しているわけではない。

私たち指導者は、他の人々に求めるような人物に自らならなくてはならない。そうでなければ、その偽善は非難となって私たちに返ってくる。

バプテスマを望む者は、事前にすべての罪を悔い改めるように求められる。この儀式を執行する神権者も同様に、完全に罪のない状態に自らを整えるべきであるとするのは矛盾しているであろうか。これは福音のすべての儀式について言えることである。

自己の不正な行ないを隠し、聖なる召しの精神に従って率直に模範を示そうとしないことは、偽りであり、恥ずべきことである。……

私たちの立場および責任は、何世紀も前にモルモンが息子モロナイに述べたものと全く同じである。

「しかし私の愛する子よ、民が強情であるにもかかわらず私たちは熱心に努めようではないか。私たちは一切の義しいことに敵する者に勝って神の王国で私たちが安息につくために、この肉体を持っている間になさねばならぬ務めがあるから、もしその務めを怠るならば罪のある者とされなくてはならない。」(モロナイ9:6)

時には困難な場合もある。しかし福音の原則に従って生活し、正しい標準を維持し、義しい理想を固く持つことによって、良い模範の力を行使するように努めるならば、この世においても来たるべき世においても報いを得ることができるのである。

「原則を高く掲げるために特別な策は要しないが、その原則を守り通すことには時として困難が伴う」という言葉がある。

「キリストにより善と悪の律法が与えられたので、もはや我々に標準がないということはない。……」(レオ・トルストイ「戦争と平和」)

私たちは正直、高潔、潔白、道徳、知恵の言葉の遵守、その他理想的な行ないに関するすべての啓示を実践し、模範とならなければならない。そうしてこそ私たちは人々に對して正しい模範を示すことができるのである。

私たちは生活の中にこれらの基本的な特質を生かし、愛する人々、友人、その他交わりを持つ人々に確信を持って「私にならってあなたがたの見た私の行ないをあなたがたもしなさい」と言えるだろうか。

これが私たちの責任であり、義務であり、チャレンジである。

私たちがいついかなる時にも力と勇気を持って手本となるような生活をし、主のみ前に義しく歩み、すべての人々、特に私たちの子供や家族の先達となることができるように願っている。これらのことをイエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。

「真理は人を変える」私はバプテスマを受ける前、自衛隊で自分勝手な目標を作り、人に迷惑をかけなければ何をしていてもよいと、酒、タバコ、マージャンなどで自分をごまかし、日々空しく過ごしていました。しかし、バプテスマを受け、素晴らしい兄弟姉妹の愛を知り、人生の目的、神様の測り知れない愛を自覚することによって、この喜びを人に伝えたいと、仕事をやめて伝道の準備をしていました。そうしている時、建築宣教師として熊本に行かないかという話があり、軽い気持ちで行くと返事をしました。どうせ、すぐ伝道に行くのだからという甘い考えもありました。そして昨年9月1日に工事を始めました。私はすぐ自分の甘い考えを反省させられました。このプログラムは神様から与えられた素晴らしいプログラムです。素人6人と監督、副監督計8人で始め、その後ふたり加わり、計10人で行なっています。何もわからないのに、神様は不思議な方法で私たちを導いて下さいました。一つ一つの仕事を一致して行なう時、神様の導きを感じることができました。

教会堂建築に携わって



菊池 慎一

日本福岡伝道部
熊本支部

けがをしても、あくる朝痛みはなくなり、傷も癒されていたり、不可能なことも可能になるのです。

監督たちや教会の兄弟姉妹の愛によって支えられ、徐々に建物らしくなってきました。建物自体が伝道することにもよく知ることができました。バスや自転車などで前を通って行く人たちが、こちらを見て話したり、昼休みには、近くの病院の人たちが遊びに来て教会のことを話したり、業者の人

たちと仲良くなったり、このように教会堂建築を通して伝道することができました。またこの建物で求道者の方々がレッスンを受け、バプテスマを受け、その後聖餐を受けたり、福音の勉強をしたりする所だと考える時、胸に熱いものを感じます。また福千年の時も残るのだということも。

業者の人たちがこういう話をしていました。ここの建物は今まで経験がない位、堅く、頑丈だと……。やはり神様の建物だとはっきり知ることができました。私たちはこの建物と共に自らの信仰を立てているのだということもわかりました。

私のような小さな者でも神様は導いて下さいます。この教会は真実の教会であり、神様は本当に生きてましまし、不思議な方法で私たちを導いて下さいます。

真の喜びは神様の愛を通して来ることを強く証します。限りない神様の愛に感謝し、すべてイエス・キリストのみ名を通して証しました。アーメン。



西 晃男
日本札幌伝道部
専任宣教師

宣教師としての喜び

バプテスマの白い衣装に身を包んだ人が4人、私の前にいる。そう、ここ稚内にも福音の光が輝き始めたのだ。

1976年10月9日、樺太からの引き揚げ者のひとりである岩田兄弟が、愛する姉妹と共にバプテスマを受けた。岩田兄弟はこう証する。「神様の戒めを守り、日の光栄の王国で永遠の家族を

持つことができるように努力するこの教会は、真実の教会です。」目を閉じると、あの夏の日の出来事がまるできのうのこのように心に浮かんでくる。

旧盆も間近い、8月のある夜のことであった。私たちは星のまたたく空を見上げながら、とぼとぼと歩いていた。ところがどうということだろう。私の足はひとつの方向を目指してひとりでに進み始めた。どこへ行くのだろう。闇の中に大きなトラックが見えた。私の足はそのトラックと壁の間の1メートル位の隙間を通り抜けていく。そして、大きな玄関の前で止まった。昼訪問したが留守だった家である。

ブザーを押した。子供のかん高い声と一緒に足音が聞こえる。「今晚は、私は西長老と申します。こちらは同僚のカーリング長老です。私たちふたりは末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師です。今晚、少しお話をさせていたでいてよろしいでしょうか。」出て来

た奥さんの返事は素っ気ないものだった。「せっかく来ていただいたんですけど、結構です。」「御主人に取り次いでいただけませんか。」「話をうかがう気持ちはないと思いますわ。」そんな問答を繰り返した後で、奥さんは奥に引っ込んでしまった。長い時間が経過したように思えた。

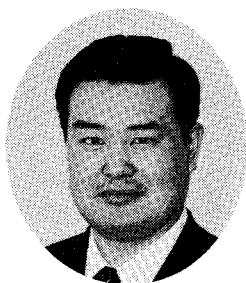
また子供たちの足音がして、ついに御主人が顔を出した。私たちは彼の物腰の柔らかさと、彼の口から出た言葉に驚いてしまった。「どうぞ入って下さい。」

中に入ると、彼はこう切り出した。「実は今、キリスト教会に入ろうと思ひましてね。あなた方のような方が来てくれるのを待っていたのですよ。」これがみたまの導きでなくて何であらうか。

その日からレッスンは始まった。初めはなかなか進まない。だが奥さんは、私たちがお茶を飲まないことを知って、

3回目のレッスンからは昆布茶を出してくれるようになった。

同僚がローズ長老に代わって2度目のレッスンの時、私は知恵の言葉のチャレンジをしようと決心し、同僚と共に断食し、祈った上で岩田家族を訪問した。最初から強いみたまの導きを感じた私は、みたまのささやきのままにバプテスマのチャレンジをした。彼らは同意した。続いて知恵の言葉のチャレンジ。これも問題はなかった。



野口 庸 治
日本岡山伝道部
鳥取支部

私の生活を変えた福音の力

この紙上を通して全国の皆様に菜園の紹介と信仰の喜びを証する機会がありますことを感謝しています。

昨年台風17号による豪雨と今冬の記録的な豪雪は、鳥取支部の会員に食糧貯蔵の大切さを教えてくれました。ひとりの会員は、貯蔵したかんづめを、現在岡山支部の教会堂を建築中の建築宣教師たちに支援物資として提供しています。

私は地方部宣教師であった頃、同僚から「自分の家の畑地が少し余裕があるので使用できる」と聞き、早速神権者が中心となって畑地を整備し、いつ何を植えるか検討しました。大雪で雪解けが遅く、作業が遅れるのではないかと心配しましたが、3月になってから温暖な日が続く、例年通りの時期に作業ができました。4月中旬から5月初旬にかけての土曜日や休日には、新緑の中、会員が慣れぬ手つきで畝やスコップを持ち、ジャガイモ、ナス、キュウリ、トマト、ピーマン、ニンジン、レタス、カボチャ、トウモロコシなどを植えることができました。夏頃には

こうして岩田家族はバプテスマを受け、今では東京神殿で永遠の結び固めをする日を首を長くして待っているが、ここまですべてがスムーズに運んだわけではない。安息日に仕事をしなければならないこと、什分の一の問題……。しかし彼らは、それらを一つ一つ克服していったのである。バプテスマを受けるにしてもフォントがない。私と同僚は魚を入れる網箱をリヤカーで教会まで運び、ビニールを敷いてお湯を入

私たちが植えた野菜が食事で登場するでしょう。菜園の事業は今年が初めてなので、苗を枯らしたりしていますが、野菜についてもっとよく勉強し、菜園を通して会員の一致をはかりたいと思っています。

この菜園に代表されるように、教会の仕事は楽しいものです。しかし一番気をつけなくてはならないことは、両親からあるいは周囲の人々から、「教会の仕事はするけれど家の仕事はできないのか」と非難されることです。確かに教会で働く時は、若い人々と共に楽しく働くことができます。正直に言っても、家の仕事は教会で行なう仕事と同じ内容のものであっても楽しくは働けないという問題もあります。これでは、なぜ福音を学んで毎週安息日に教会に出席しているのかわからなくなってきました。しかし、日々聖典を研究して福音の中に生活するならば、家庭の中の光が教会に持ち込まれ、教会の中の光が家庭の中に持ち込まれて、家の仕事も教会の仕事も喜びをもって行なうことができます。私は改宗して2年半このことに注意を払ってきました。ここで福音が私の生活を変えたことをお話



れた。

確かに神は生きておられ、まず神の国と神の義とを求める人々にはすべてが添えて与えられることを証する。私は岩田家族を通して、教義と聖約18章にあるあの「悦び」を知った。今宣教師として、アルマ書29章9-10節の聖句が真実であることを心から証する。この教会は真実の神の教会である。すべてイエス・キリストのみ名により、アーメン。

したいと思います。

私も多くの兄弟姉妹たちと同じように、家族では自分ひとりが末日聖徒です。しかも両親は私が教会に集うことをあまり快く思っていない。改宗以前は口答えが多く論争にもなりましたが、バプテスマ後はとにかく「模範」を自分自身に強く言い聞かせてきました。やがて小言を言われても口答えをしないでむしろ親の後ろにまわり肩も心もほぐし、夕食後は食器を全部洗うようにし、今ではそれが日課になっています。両親は教会に行くことについては黙認するようになりましたが、問題は数々あります。忍耐が必要だということがよくわかります。あきらめないで求めれば、時間が長くなる時もあると思いますが、必ず求めているものが与えられると確信しています。

全国の兄弟姉妹、教会に集う時、両親が反対しているから、あるいは障害があるからと言って人のせいになしないで下さい。迷いをくよくよ考えないで今までに一回でも喜びを感じた時を思い出してその種を大きくしていくことが大切だと思います。信仰によって自分の生活の一つ一つ改善していけば確かに大きな祝福が与えられます。末日聖徒イエス・キリスト教会は末日の世に回復された神様の管理される真の教会であることを証致します。皆様方の健康が祝福されていることを喜びとし、すべてイエス・キリストのみ名により申し上げました。アーメン。



宣教師になる決心

日本仙台伝道部

専任宣教師

鈴木 富子

私が教会員となってから、1年と10ヵ月たちました。そんな私が伝道に行くと言った時、多くの人は信じられないと言いました。伝道に出るために長い年月は必要ではありません。しかし私の場合は、信仰もとても弱かったのです。そんな私が伝道に出た裏には、そのきっかけとなるひとつの大きな出来事がありました。

教会を知るきっかけは数多くあると思います。私はちょうど20歳の時、20歳になったんだから何かひとつのものに取り組んでみたいと思いました。その思いが次第に強くなり、そのことを考えると眠れないほどでした。そして新聞を隅から隅まで読んだり、人の話に注意して耳を傾けたりしていました。

そんな時、小さな新聞の片隅に、無料英会話という広告を見つけました。私はそれを見て、そうだ、ここへ行ってみようという気持ちになりました。英語の嫌いな私がなぜ英会話を選んだのでしょうか。友達と一緒に1年位通い続けたでしょうか。教会については全く関心がなく、友達が宣教師と約束を取った時には、断わった方がいいよと忠告したほどでした。そんな私が教会のことを学び始めました。宣教師から真理を知りたくありませんかと言われ、無知だった私は、真理なら宗教ではないから勉強してみようかと思い、レッスンを始めたのです。こうして、私の心にも信仰が芽生え始めました。

レッスンが進み、バプテスマのチャレンジが出ていた頃、私は1年間忘れていたことを思い出しました。そう、1年前の私は、自分が全精力を傾けて行なうことを捜し求めて、夜も眠れないほどだったのです。バプテスマのチャレンジについて考えていた時、私の心の中に捜し求めていたものはこれだという気持ちが起きてきました。こうして私はバプテスマを受けました。しかし、弱い弱い信仰でした。その弱い私に大きな試しがやってきました。突然の母の病気で。それはまるで、私が教会に入るのを待ち構えていたかのようでした。医者から今の医学ではどうしようもないと言われた時、私はただただ主に祈りました。頼れるのは主だけでした。でも、母の容態は一向に回復に向かいません。こうして、私の信仰の灯は次第に小さくなっていきました。祈りが答えられなかったからです。

そんな時、多くの人たちが私を励まして下さいました。ホームティーチャーは本当に必死になって助けて下さいました。一度去った教会に戻った時に、讃美歌54番『羊を守る羊飼の愛』が流れていたのを忘れることができません。

それから、何があろうとまず神を信じようと思い、頑張りました。学校を休み、一生懸命に看病をしました。でも、看病をする自分の心も肉体も次第に弱っていきました。そんな中で、私は奇跡が起きることを願ってとても無茶と考えることをしま

した。長い断食はいけないと言われていましたが、一日のほとんどを断食し、それを1週間続けたのです。1週間過ぎて何も起こらなかった時、もう立ち上がる気力もなくなり、ふと数分間意識を失いました。その時、短い夢を見ました。長い長い階段を3人の御方が降りてくるのです。そして中ほどにすわって悲しんでいる私の前で止まりました。見上げると3人の御方の中のひとりが私の手を取り、私に話しかけました。「あなたの苦しみはわかります。でも頑張ってください」その手は、今までに感じたことがないほど温かく優しい手でした。私はその御方に向かって「あなたは神様のようですね」と言ったとき、その御方は優しくうなずいて下さいました。そしてまた階段を降りて行きました。

意識が戻った時、今までの悲しみは喜びに変わっていました。私たちの苦しみを御存知の上でそのようになさるのなら、そして頑張ってくださいと言われるのならそのようにしようと思いました。

間もなく母は死にました。この母のおかげで、私の信仰はどれほど大きくなったことでしょう。それから次々と祝福がありました。当時看護学校に通っていましたが、特殊な学校です。それで休日分を全部完全に取り戻さないと卒業できません。それで休日を使って学校に行き、勉強しましたが、2ヵ月も休んでしまったのでとても卒業式には間に合わないはずでした。でも、それが卒業式の2週間前に終わってしまったのです。

それからステーク宣教師に召されました。この責任は私を伝道へと駆り立てました。責任を通して伝道の喜びを知った私は、フルタイムの宣教師として働きたいと思うようになりました。ある時は同僚と、喜びに満ちた心で、主に感謝しながら訪問先から帰りました。また求道者について真剣に祈った時、同僚と全く同じ答えを受けたこともありました。

伝道に行くにあたって準備することはたくさんありましたが、神を信頼して努力した時にすべて解決しました。ある時は何回交渉しても仕事がやめられず、もうだめかと思ったこともありましたが、監督をはじめいろいろな方々の助けを得て何とかやめることができました。伝道について、家族や親族はほとんど反対しませんでした。話しても神の存在は信じませんでしたが、自分で責任を取るなら、また迷惑をかけないのならやりたいようにやっていいと言われました。心配していたお金は親と教会員からの援助でまかなうことができました。特に教会員からは大きな助けをいただきました。

このように、目に見える準備はほとんどしましたが、召しが来ません。毎日郵便屋さんが来るのを待ちました。でもそれも2ヵ月近くになると、自分の信仰が弱いから召しが来ないのだ

という悲観的な気持ちになり、暗うつとした毎日を送っていました。でも、そのような時でも、私は祈ることは忘れませんでした。私は「みこころでしたらどうぞ召して下さい」と祈りました。そしてその時「召しはもうすぐ来ます」という答えを受けたのです。召しが来た時、その日付を見てびっくりしました。ちょうどその答えを受けた頃だったのです。また、召しが来るだいぶ前に、仙台に行く夢を2度見ました。初めの時はもっと遠くへ行きたいと思っていましたので、いやだなと思いました。2度目の時は、やっぱり仙台かと思いました。何と高慢なことでしょうか。私は自分で場所を選ぼうとしていることを恥じ、「許して下さい、みこころのところにいきます」と祈りました。それから10日ほどたった朝、夢の中で「召しが来た、召しが来た」という声に目が覚めました。そして、本当にその日に召しが来ました。この時の喜びをどう表現したらよいでしょうか。

20歳の時に私が眠れないほど求めていたもの、それは伝道だったのです。

私は母から信仰を育てられ、ホームティーチャーから信仰を

強められ、同僚から伝道の喜びを教えられ、そしてたくさんの人々からの援助を得て、変わりました。真理は人を変えるという言葉は真実です。

私の信仰生活は戦いでした。私は疑ってばかりいました。私は素直ではありませんでした。これらすべての経験を通して知ったことは、何があっても神を信頼することでした。中途半端な信頼ではなく、心から信頼すること、そして素直になることでした。そうした時に、はっきりと神の愛を知ることができたのです。

父は、教会に入る時も伝道に出る時も反対しませんでした。私を信頼してくれたのです。そして、神は私を信頼して宣教師に召して下さいました。私も、心から神を信頼して働きたいと思います。どんなに疑っても、神が生きているという事実はくつがえすことができませんでした。主は生きていました。この教会は真実でした。モルモン経は真実でした。今まで助けて下さった方々に心から感謝します。これらをイエス・キリストのみ名によって証します。アーメン。

アルビン・R・ダイヤー長老 逝く

去る3月6日、七十人第一定員会会員のアルビン・R・ダイヤー長老がその現世での生涯に終止符を打った。74歳であった。1958年、54歳で十二使徒評議員会補助に召された彼は、以来20年間、教会幹部としての重責を果たしてきた。

葬儀は3月9日、N・エルドン・タナー第一副管長の司会によって行なわれたが、その中で十二使徒評議員会会長のエズラ・タフト・ベンソン長老は、ダイヤー長老を評して、「彼はこの教会に、模範と指導力という偉大な遺産を残した」と述べた。

彼が大指導者の片鱗を見せ始めたのは高校時代である。大投手としての将来を嘱望されていたにもかかわらず、彼は教会の若人の模範として、東部諸州への伝道に旅立った。1922年のことである。そして帰還後、プロ野球のチームから入団を懇請されたが、日曜日に試合をしなければならぬということ断わり、板金工として働く傍ら、通信教育で機械製図と技術工学を学んだ。

1926年6月2日、ソルトレイク神



殿でエリザベス・ジャクソンと結婚した彼は、1934年、ユタ・ビルダーズ・サブライ社の空気調節部長となり、それから15年後の1949年にはダイヤー・ディストリビューティング社を設立、中部諸州伝道部に伝道部長として召される1955年までその経営に従事した。

この間ダイヤー長老は教会の召しを忠実に果たし、指導者としての資質を着実に伸ばしていった。そして数々の職を経験した後、1958年10月11日に十二使徒評議員会補助に任命され、教会幹部となった。

さらに1967年には、十二使徒評議員に

任命されないままで使徒に聖任され、大管長会副管長となった。このことについてベンソン長老はこう語る。「彼はミズーリの奉献された地を見守る者になるという祝福を宣言された。」ベンソン長老によれば、ダイヤー長老はインデペンデンスに訪問者センターを建設する件で大きな貢献をしたと言う。この訪問者センターは今日、世界中で最も影響力の大きいセンターとなっている。

マッケイ大管長の死後、彼は副管長の職から解任され、もとの十二使徒評議員会補助の職に戻った。また1972年に脳いっ血で倒れたにもかかわらず、教会歴史部実務部長の召しを受けた。

葬儀の折に、七十人第一定員会会長のマリオン・D・ハンクス長老はこう語った。「アルビン・R・ダイヤーは、その広汎多岐にわたる使命を完了する間に、数多くの人々の生活に祝福をもたらし、その心に喜びを与えた。彼はそれを勇氣と偉大さと高潔さをもって行なったのである。」

◇お詫び訂正◇ 聖徒の道4、5月号に以下の誤りがありましたのでお詫びして訂正いたします。

4月号 p. 242 1段目下から7行目 1930年→1830年、同じく下から3行目 1931→1831年

5月号 p. 257 上から2行目 ジョセフ・スミス→ジョセフ・F・スミス

聖 徒 の 道

1977年6月20日発行（毎月1回20日発行）
昭和42年12月18日第3種郵便物認可

